

---

# ネギま！？王になった少年！

koko

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギま！？王になった少年！

### 【Nコード】

N8089L

### 【作者名】

koko

### 【あらすじ】

ネギまの世界にFateのセイバーの能力を貰い新しく王国を築く一人の少年の物語。

この小説はオリジナル要素等が沢山あります。ネギまの世界観が壊れる等そう言うのが嫌な方や文句を言う人は見ないでください。マブラヴをメインで書いているのでこちらは偶にしか更新できません。

なので更新は不定期です。

## プロローグ（前書き）

この小説はオリジナル要素等が沢山あります。ネギまの世界観が壊れる等そう言うのが嫌な方や文句を言う人は見ないでください。

## プロローグ

「ここがアーサー王伝説でベディヴィアがエクスカリバーを返した湖か」

今俺は昔から好きだったアーサー王の軌跡を辿っていた。

アーサー王と言えば幾つもの伝説や逸話等が数多くあるが、その中でも有名なのはやっぱり聖剣エクスカリバーだろう。

エクスカリバーは湖の乙女から授けられた剣と言われ、アーサー王の物語の中でも重要な位置を占め、他の色々な作品でも使われたりしている。

まさに剣の代名詞と言えるべき物だ。

さらにその鞘には所持している限り血を流すことなくなる力があり、むしろ剣そのものより貴重であったと言われている。

それで最後にエクスカリバーが返された湖に来てみたのだ。

「おつあそこに小船があるじゃん！ちよつと乗って行ってみるか」

小船を漕ぎながら湖の中央へ向かった。

「綺麗な場所だな」

そう思い湖の中に手を入れると湖の中から手が出てきて一瞬で掴まれた！

「うわぁっ！？な、何だ！？離せ！」

だが抵抗も虚しく湖の中に引きずり込まれた。

目を開けてみるとそこは知らない空間だった。

「あれ、俺は一体・・・！そっだ！俺は湖で変な手に掴まれて湖に引き擦り込まれたんだ！」

思い出し確認してみたが自分には何の変化もなく特に異常は見られなかった。

そんな時に後ろから声を掛けられた。

「変な手とは随分な言い方ね？」

声のした方を見てみると其処には美しい女性が立っていた。

「あ、あなたは？」

驚きながらも質問を返した。

「私？私は世間では一応湖の乙女って言われているわね、貴方は？」

その返事に驚きを隠せなかった。

「あ、俺はツルギ・マーフェス……って違う！ちょっと待ってくれ、湖の乙女ってあのアーサー王伝説の？」

「そうよ〜エクスカリバーを授けた湖の乙女よ」

あまりの出来事に頭が混乱していた。

「混乱するのも判るわ、私自身今時この湖に来る人なんていないから気になってこんな事したんだもの。それにここに居ると暇でね〜まあ偶に地上に上がったりもするんだけど」

「はあ、それでその今時珍しい俺に何か用でも有ったのか？」

「暇つぶしがしたかったのよ、私の持っているこの白紙の本あるでしょっ？」

ツルギに見せられた本は何も書いてなく真っ白い本だった。

「それがどうかしたか？」

ツルギがそう聞き返すとありえない返事が返ってきた。

「あなたがこの本の主人公になりなさい！」

「はあっ!?!？」

「態々この湖に来たって事はアーサー王に興味があったんでしょ  
う?。」

「確かにそうだがそれがなんだって・・・」

「ならそうしてあげる」

訳も判らず話しだけが進んでいく。

「なあ訳が判らないんだが？」

「ツルギ、貴方アーサー王の様になってみたいでしょう?。」

行き成り湖の乙女がそんな事を言ってきた。

「成れるならなってみたいが無理だろ」

そう言つと湖の乙女がとてもいい笑顔で此方を見ていた。

「成れるわよ、私は一応神の眷属だからね、と言つ訳でえい!。」

「うわっ!?!」

掛け声と共にツルギが光に包まれた。

光が収まると其処には腰に剣を提げ誰しもが振り向く黒髪の男が居た。

「これでよし!その腰の剣は知っているとと思うけどエクスカリバーよ、鞘は持っているだけで不老になるし、自動で傷も回復させてくれるうえに、真名開放すれば最強の防御壁になるから。本当は不死になる効果も鞘にはあるのだけど止めて置く事にするわね、つまりなくなるから。他にも能力付けといたし、使い方は頭に叩き込んだから。それとこれから送る違う世界にはパートナーとの契約と云うのがあるのだけど、貴方と契約する者は不老になるから考えて契約してね」

能力?契約?違う世界!?自分の身体や能力の知識が頭の中に流れ込んで来て、余りの出来事に混乱してしまっていた。

「世界は直接自分で確かめてねーその方が面白そうだし」

「ちよっと待った!簡単に言いすぎ!それに違う世界に送るとか何言っちゃってるの!?!それに俺には家族とか今の生活とかあるんだぞ!?!」

「それは私が修正しとくから安心して、ツルギは新たな世界で好きに暮らしてね!主に私の暇つぶしの為に!」

「おいおい滅茶苦茶だな!?!」



行き成りこんな滅茶苦茶な事を言われて、もう何を考えたら良いのか分からなくなっていた。

「大丈夫！大丈夫！あっちの世界で好き勝手にやりなさい！そうすればこの白紙の本にその世界が漫画として映し出されるから！」と言っただけで言っただけじゃいい！」

そう言い終わるとまたもや光に包まれていく。

「うわぁ！？まだ行くと返事すらしてないのに急すぎるだろ！？」

そう言いながらツルギは消えていった。

## プロローグ（後書き）

修正しました。

## 1・初めての異世界（前書き）

結構変更したので読み直してみてください。

それと世界観が壊れる、オリ主、オリキャラが気に入らないと言っ  
人などは見ないでください。ではどうぞー！

## 1・初めての異世界

「湖の乙女め……幾等なんでも急すぎる」

とりあえず、周囲を見渡して見ると、自分は深い森の中に居るといふ事実だけが目に映っていた。

周囲全てが森。

だが、もしいきなり街のど真ん中に急に現れたりしたら、大変な目にあつてただろうから其処はそう考えると、森の中で良かったのかも知れない。

さて、これからどうするかな……

とりあえず森を出たいが、街が近くにあるかも判らないし、普通に考えたら飲み水と食料の確保かな？

「まあ、まずは水場の確保だな」

まずは移動しないと、方向も判らないし適当にうろつくか。

それにエクスカリバーの鞘、アヴァロンがあるから死にはしないだろう、所謂不老不死ってやつか。

俺はこの世界を知らないから……まず人がどうなっているのかも判らないし……

俺の世界の様な地球ならいいが、変な世界だったら如何しようか

……まあそれでも何とかなるかな？

でも不老不死だとずっと一人孤独に耐え過ごして行かないといけないのか？

それは嫌だな……まあ今はそれより行動しよう。

とりあえず、獣らしき足跡等の痕跡があるため、とりあえず生物はいると言う事は分かった。

もしかしたら、この世界は人とは全く違う存在が人の代わりという可能性もあるが、それでも孤独よりはよっぽど幸せだ。

これがリアルな夢……何てそんな訳ないか。

「そんな事より探さない」と

暫らく森の中をさ迷っていると、何か背後から近づいて来るのを感じた。

まあ獣くらいは森なのだから当然と思ってはいたが……

「……嘘だろ？」

そこに居たのは三つ目の狼が、此方を餌だと思っているのかじりじりと此方に近づいて来る。

「グルルルルル」

三つ目狼は唸り声をあげ、よだれを垂らし今にも跳びかかって来そうな雰囲気だ。

「ああー異世界初めての出会いがこんなファンタジーな獣とは……」

「ガアッ！」

肩を落とした所を好機と見たのか、勢いよく此方へ跳びかかって来た。

だが俺は慌てる事無く、インビジブル・エア風王結界によって見えなくなっているエクスカリバーを腰の鞘から引き抜き、一瞬にして狼の首を刈り取った。

「凄い……身体が勝手に動いたみたいだ。瞬間的に何をすれば良いのが分かり、剣技も何も無いが簡単に狼の首を切り裂くことが出来た」

戦える。

これが分かっただけでも生きていける確率が上がる。

とりあえず真っ直ぐ森を歩いて行くと、道らしき物が見えてきた。

それを道なりに歩いて行くと、大勢の人間が集まる街らしき物があった。

人間が誰もいないという事は無いようだ。

「さて問題は普通の街かどうかだが……こればかりは行って見なければ分からないか」

一人で呟いた。

街の入り口に目を向けるとそこは余りにも酷い光景だった。

目の前には汚物に死体が散乱していた。

「これは……」

胸に刺さっているナイフが死んだ原因だろうな……



「山賊あたりに襲われたか……」

男達が身につける粗末な服装、そして明らかにクズ鉄を寄せて作られたナイフへと目を向ける。

「服の素材は木綿の類、街の入り口は木製の門」

時代的には中世か？と思いながら周りを確認する。

打ち捨てられた木の立札に、何やら文字らしきものが書いている。

自身の知識に無い言語ではあったが湖の乙女のおかげか、理解する事が可能であった。

街の中に入ると今も襲われているのか、彼方此方で悲鳴が聞こえてきた。

そのまま進んで行くと、街の人達を襲っている男達が目に入ってきた。

無抵抗の人間を山賊達は笑いながら殺していく。

男は問答無用で殺され、女は慰み者になったのか、衣服が破られて殺されている者もいた。

「あん？何で手前は？男だしついでに殺しとくか」

血に染まった剣を見せて、山賊は凄んで見せた。

「そうか……」

「何だ…びびったのか？ならそのまま」

笑いながら剣を振り上げ、呟いていた瞬間、山賊の首は飛んでいた。

それを少し離れていた場所から見ていた仲間らしき男が、叫び声を上げた。

「き、貴様ああ！！おい！だ」

だが最後まで言わずにその男の首も刈り取った。

しかし先程の声は聞こえていたらしく、次々と仲間が集まって来る。

機先を制し相手の先頭にいた巨躯の男の間合い入った刹那、男がその手に持っていた剣をこちらに振り下ろされたそれを、紙一重でかわす。

そして間髪入れずに胴体へ回転を加えた横なぎの一撃を入れる。そこへ別の男がすかさず襲い来る。

だがその男が攻撃するよりも早く剣を閃かせた。そしてその場に立ち止まることなく次の敵へと向かって行く。

普通一人で大勢を相手にする際に重要になってくるのは、いかに一対一の状況を作るかである。

まだ戦闘経験の少ない自分では多数を同時に相手にすれば多方向から攻撃され、対処が難しくなってくる。

ならば、同時に相手をせず、一人一人確実に打ち取っていく方が確実だ。

故に立ち止まらない。囲まれず常に相手を攪乱し、確実にその数を減らし、こちらに有利な状況を作り出す。

暫らくして全員殺せたのか、街の中に響いていた悲鳴が聞こえなくなつた。

その死体の中を静かに歩いていくと山賊の馬車を見つけた。

その中から「誰か助けて！」と言う声が辺りに響いていた。

## 1・初めての異世界（後書き）

誤字報告があった場合、宜しく願います。

2・ノールレ・ハインデルク(前書き)

短いです……

## 2・ノーレ・ハインデルク

馬車から聞こえてきた、誰か助けると言う声にツルギは歩を進めた。

ツルギが堂々と馬車の中を覗き込むと、中には猛獣を入れるような丈夫そうな金属製の檻と、汚れた女の子が数人。

その子供達には痣と泥と血が、その小さな体にくまなくこびりついている。

そのうち一人の子供が目に入った。

子供は赤い髪にきりつとした目、恐らく売る為に連れて来られたのだろう。

「お願い！助けて！山賊に慰み者にされて売られる位なら、貴方に従います！連れて行ってください！役に立ってみせますから！」

他の子供達も泣き叫び、その声は必至にツルギに訴えかけていた。

S i d e    ? ? ?

私は絶望していた。

この街に来る前に村で何時もどおりに暮らしていた。

それは普通の事だった。

だがそこに不運にも山賊に襲われてしまった。

何時も優しくしてくれた両親は山賊に殺され、自分は山賊に捕ま  
り何処かに売られる事が決まった。

それに売られる前に山賊達の慰み者になる可能性もある……

だが山賊達は直ぐにアジトには戻らず、そのまま街に行つて襲つ  
と言い出した。

暫らくして街からは悲鳴が聞こえてきた。

この街でも子供達を攫い私と同じように檻に入れられていく。

きつと此処の人達も子供は売られ、大人は自分の村のように殺さ  
れるんだと思つていたが、急に悲鳴や音が聞こえなくなった。

私は怖かったが声を上げて助けを呼んだ。

そんな私が絶望していた時に、その青年は現れた。

綺麗な黒髪に銀色の甲冑、腰には綺麗な鞘に入っている剣を携え  
ている。

まるで御伽噺の中に出てくる勇者のようだった。

だから「お願い！助けて！」と一生懸命に叫んでしまった。

S i d e O u t



「お願い！助けて！山賊に慰み者にされて売られる位なら、貴方に従います！連れて行ってください！役に立ってみせますから！」

そんな事を言われるまでも無く助けるつもりだったツルギは、ピシフル・エア風王結界で見えなくなっているエクスカリバーを腰の鞘から抜き、檻を簡単に切り裂いた。

「えッ………」

女の子は自分の頭に乗せられた手を見ながら目をパチクリとさせていた。

「これで君達は自由だ」

子供達は一斉に檻から飛び出て行った。

赤い髪の女の子はそう言った瞬間安心したのか、ツルギの腕の中に倒れこんだ。

「おっと」

ツルギは確りと抱きしめて抱え上げ、そのまま比較的何とも無い家に向かって歩き出した。

「あれ……」

のばされた手が、はかなく空をつかむ。

「私は……」

そこは見たこと無い部屋で、白いシーツに包まれたベッドの上だった。

ベットは攫われてからは初めてだったので、何処か安心できた。

「おや、目が覚めたか」

声を掛けられた少女は吃驚して視線を向けた。

部屋に入って来たツルギは、部屋に置いてあった椅子をベットの横に置き、そのまま少女に向き直った。

「一応怪我は無さそうだな」

ツルギの言葉に少女は頷いた。

「さ、先程は助けていただいて有り難う御座いました！あ、私の名はノーレ・ハインデルクと言います」

「あゝそう言えば自己紹介していなかったな……俺の名はツルギ・マーフェス。まあツルギって呼んでくれ」

「はい、ツルギ様でよろしいですか？」

「いや、様もいららないんだが……」

「そう言う訳にはいきません！従者として主を様付けで呼ばないなんて事は出来ません！」

「従者！？いや君は自由だ、元の生活に戻ると良い。助けたからってどうこうするつもりは無いよ」

「私はこの街の者ではありませんし、私の村は山賊たちに滅ぼされました。だからツルギ様の為に働かせてください！」

「ああ、本当に良いのか？」

「はい！」

「分かった。これから宜しく頼む。所で聞きたい事があるんだけど」

「宜しくお願ひします！聞きたい事とは？」

「実は今迄世間に出た事が無くて、この世界の常識とかを知らないんだ……だから教えてくれないか？」

「この世界の事ですか？私も田舎に居たので詳しくは判りませんが、この魔法世界では魔法使い達を中心に幅を利かせています。特にメガロメセンブリアと言う国はその傾向が強く、魔法を使えない者達は追い出したり、見下したりしているそうです。他には吸血鬼や、ユニコーン、ドラゴンなどの幻獣等も居ますね。大雑把に言えばこ

んな所です」

「成程……魔法使いねー」

魔法の種類や威力、他にも通貨、時間や暦、文明レベルに宗教と  
いった、詳細事項をノーレから聞き出した。

「お役に立ちましたか？」

「勿論だ。それじゃそろそろこの街から出るか」

「はい！」

そしてツルギは椅子から立ち上がり歩き出した。

ノーレも急いでその後を追って行った。

### 3・魔法使い

あれから二人は街の人達から感謝され、次の街を目指して歩き出した。

途中、獣等に襲われながらも順調に進んで行く。

東へ10日程歩いて行くと、前方に広い草原が広がっているのが見えてきた。

それは田畑で人が住んでいる事を証明する物であった。

「ああー漸く人が居そうな所に来れたな」

「はい、これで少しはゆっくり出来ますね」

「そうだな、早く行こうか」

それなりの大きさに見える街。

ツルギとノーレはこれくらいの大きさの街なら賑わっているに違いないと思っていた。

けれど、歩き出して数分　田畑の枯れた光景を見ると、その興奮は次第に収まって行った。

「これは……」

「この田畑やせていますね……」

二人は周りの田畑を見て、静かに呟いた。

収穫期を終えているとしてもこれは酷い。

田畑に生える物はほぼ枯れ落ち、精いっぱいツタを張っている状況である。

大地も栄養なく、しなびれ乾いている様子が見えがえる。

ひどい有様だった。

「誰か人はいないのか？」

「ツルギ様あそこに人が」

ノーレが指差す方向に一人の農夫が居た。

近づいて行くと農夫は此方を見て、何処か安心した顔をしてみた。

「旅の方ですか？どうかしましたか？」

「ちょっと聞きたいのだが如何してこちら辺の田畑は荒れているのだ？」

「旅の方、この街はメガロメセンブリアから魔法が使えないと追い出された者達の、捨てられた街なのです」

「……そうだったのか」

「はい。追い出された我々は此処に街を造りました。ですが彼らはそれを知ると、我々の国の者達なのだから税金を納めると魔法使い達を送つて来るようになったのです。我々が魔法には逆らえる訳も無く、税金を払う事になったのですが、その額がとても高く、払えない者は殺されたりもしました。田畑がやせているのは、手入れする者がいないのもありますが、もうこの街の者達は諦めてしまっているのもあるのですよ」

「人生を諦めているのか？」

「諦めたくはない、死にたくない、ですが魔法を使えない者達にはこれが現実なのです。それより何も無い街ですがゆっくりしていい下さい」

頭を下げた農夫は去って行った。

「此処まで魔法至上主義とは……」

「はい、私も話には聞いていましたが此処までとは……」

「まあまずは宿に向かおう」

街の中にたどり着いて、ツルギは一瞬言葉を忘れた。

「前の街でもだったが、汚物が落ちているのはな……」

「大抵の街や村はこれが普通ですよ？」

「だろうな……だがこれでは病気になるだろうに」



「そうなのですか？」

「ああ、今言ってもどうしようもないが……」

宿屋は、大通りに面した所にあつた。

酒場と兼ねているらしく、木製のビールグラスが描かれている姿は、何処にでもある物だった。

宿の中に入ると店主は驚きの顔を見せた。

「此処に泊まりたいのだが」

「あ、はい。一部屋ですか？」

「いや、二部屋で頼む」

「ツルギ様！？私の為の部屋など！？」

「気にするな、お金はあの山賊のだからな」

それから二人は食事を取り、ゆっくりと部屋で休む事にした。

何か外が騒がしく、ベットから起き上がった。

一応確認しようかと思っていた所へ、部屋にノックが響き渡った。

「ツルギ様」

ノレの声がドアの向こうから聞こえてきた。

「入ってくれ」

「失礼します」

「何か外が騒がしいがどうかしたのか？」

「どうやら魔法使いがこの街に来たようです」

「はあー厄介事にならなければいいが……とりあえず行くか」

外に出てみると街中の人達が集まっているのか、かなりの人数の人々が居た。

「メガロメセンブリアからご苦労様です」

「全くだ。態々此処まで来てやっている事を感謝しろ」

「我々は疲れているんだ。食べ物に酒、それと女を持って来い」

「お前らはそれぐらいしか出来ないのだからな」

三人は醜悪な笑い声を上げていた。

街の人達も悔しそうに拳を握り締め、歯を食いしばっている。

だが相手が魔法使いの為、何も行動を起こせないでいた。

「……ツルギ様」

「どうしたノーレ……」

「そんなにも魔法を使える者達は偉いのですか？何故魔法を使えない者達は虐げられなければならないのですか？」

現実を目の辺りにし、無感情にノーレは言葉を吐いた。

「魔法は所詮手段に過ぎない……火を魔法で起こそうが、他の道具で起こそうが結果は変わらない。だが魔法使い達はそれを特別だと勘違いしている。自分達は選ばれた者だとな、全く持って虫唾が走る」

ツルギはノーレの頭を撫でると、鞘からエクスカリバーを引き抜き魔法使い達の前へと躍り出た。

「ん？何だ貴様は？おいこいつは何だ？」

「無礼者が！」

「身の程知らずが」

魔法使い達は次々と苛立ち声を上げた。

「私達は何も知りません！」

街人が声を上げて関係無いと必至で説明していた。

「何偶々この街に来ていた旅の者だよ。愚者共」

「「「な！？」「」」

今迄この様な暴言を言われたことが無いのか、魔法使い達は呆然としていた。

「き、貴様！殺してやる！」

「我々の魔法の力、思い知らせてくれる！」

魔法使い達は激昂して、手に持っていた杖をツルギに向けた。

「くらの魔法の射手！」

二人が放った魔法の射手は当たる直前に弾け飛び、ツルギには一切届く事は無かった。

湖の乙女から貰った能力の一つである耐魔力により、この程度の魔法は避ける事など必要無かった。

「これが魔法？この程度の魔法で偉ぶっていたのか？魔法使いが聞いて呆れる」

「貴様ー！」

「ふざけるなよ！」

だがツルギは魔法使い達に次の魔法を撃たせまいと、瞬時に懐へ飛び込んだ。

「なっ！？」

周囲の人々が認識した時には、既に魔法使いの一人が胴を真っ二つにされていた。

「うわあああああ！？」

ツルギに向かって魔法を撃ったもう一人は恐慌し、ツルギはその隙にまた一太刀で魔法使いを切り裂いた。

纏め役であろうもう一人の魔法使いはそれを見ながらも冷静に呪文を唱えだしていた。

「舐めるなよ！ライ・ラザム・サステリア・アルスキミア！来れ雷精 風の精！ 雷を纏いて吹きすさべ 南洋の風！ 雷の暴風！！」

詠唱を終えた魔法使いの杖から強力な雷を纏った暴風が相手に向かい襲う。

「これで終わりだ！死んでしまえ！」

この時魔法使いはこれで奴も死ぬだろうと思い、街の住人はやはり魔法使いに勝つなんて希望は無いのだと諦めたその時、その暴風を事もあろうにツルギは簡単に見えない剣で切り裂いていた。

「ひ、ひいい！ばっ馬鹿な！魔法を切り裂くなんてこんな事が！？」

そんな男に剣が突き付けられていた。

刀身が見えていないため恐怖も倍増していた。

「因果応報、今迄酷い事をしてきたんだ、死ぬ覚悟はあるんだろ？」

その声はとても冷たく魔法使いは見苦しく命乞いをしてきた。

「まっ待ってくれ、命だk……」

言い終わる前にツルギは魔法使いの首をはねていた。

「力で人を従わせてきたなら、それより大きな力で屈服させられるのが当たり前だ」

だが街の住人達は何も言えずに居た。

「ああ、なんて事を……」

「もしこれがメガロメセンブリアの魔法使い達に知れたら、我々は殺される……」

「そつだ！どうしてくれる！此の儘では我々は死んでしまっ！」

街の住人達が一斉に怒声を上げた。

「何言っているんですか！貴方達はあれでよかった言っんですか！？」

ノーレは我慢出来なくなって、街の住人に声を荒げた。

「それでも死ぬよりましだ……生きてさえいれば……」

「死ぬよりまし？生きてさえいれば？あんだ達は何を言っている？あんだ達は生きていない、存在しているだけだ」

ツルギは何の感情も浮かばせないで静かに言い放った。

「……………」

街の人達は何も言い返せなかった。

ツルギの言葉が余りにも今の自分達を的確に表していたから。

「存在しているだけ……確かに我々はそうなのかも知れませんが」

住人達の中から一人代表らしき物が出てきた。

「あなたは？」

「これは失礼を……私は一応この街で代表のような物をやっておりますクロムと言つ者です」

「私はツルギ・マーフェス、こっちが従者のノーレ・ハインデルクと言つ」

「ツルギ様。貴方は、貴方ならこの街を守る事が出来ますか？」

「……俺一人では無理だ。街の住人の力が必要だ」

ツルギはそこで街の住人達を見回した。

「俺は……」

「私達は……」

街の住人も色々と悩んでいるのが見て取れる。

「一つだけお前達に言いたい。『存在するのではなく、生きる』これを如何取るかはお前達次第だ」

だがこの言葉を聞いた住人達は何か吹っ切れたかのような顔にな



っていく。

「俺は存在するのではなく、生きたい！俺は協力する！」

「私も！自分達の故郷は自分達で守れるようになりたい！」

一人が言い出すと周りの住人達も次々と声を上げていった。

「ツルギ様、この街の新たな代表としてお願いできませんでしょうか？」

「いいのか俺で？」

「我々の過ちを指摘したあなただからこそです」

「わかった。俺でよければやらせてもらおう」

ツルギとクロムは握手をし、周りは声を上げて喜んだ。

「恐らくまた魔法使いが派遣されて来るだろう、その前に色々準備してこの街を国として誰にも侵害されないようにする。その為には皆の協力があるよろしく頼むぞ！」

こうして国作りの第一歩が始まった。

## 4・国造り（前書き）

連続投稿！

#### 4・国造り

「先ずはこの街の状況と人数が知りたいんだが？」

クロムの家で、ツルギは集まった者達に聞いた。

元々何か問題などがあると、必ず此処で今集まっている者達が相談をしていたからだ。

「この街はおよそ1000人くらいになります」

「1000人か……微妙な人数だな……」

「はい……」

「今迄税金はどうやっていたんだ？」

「すべて自己申告です。それに皆その日その日で精一杯でしたので」

「……おいおい、それじゃこの街は」

「その通りです、この街は火の車で現在動かせるお金など全くありません」

疲れたようにツルギは息を吐き出す。

今までは収穫時季が来て、メガロメセンブリアに徴収される税金を街から徴収する。

だが徴収された後にはぎりぎり生き残れるか残れないかの量しか残らない。

「酷過ぎる……」

「す、すみません……私達も少しでも街の人々に良い生活をさせようと頑張っているのですが」

「しかしこの街には、この街を守る兵士や文官は居ないのか？」

「はい……皆自分の生活で精一杯で。問題が起こった時はただは皆で相談をし、男手を集めて対処をしていました」

「そうか……それもこれから少しずつ改善させていこう」

机に置かれていた水を一口飲み啜いた。

「まずは、文官と兵士を集めよう」

「どれくらい集めれば？」

「まず、文官として働けそうな者を教えてくれ。兵士は1000人程は欲しいな……給料は詳しくは後で決める。これからはメガロメセンブリアに税金を納める必要は無いのだから、それくらいは可能だろうっ？」

「仕事につけるとわかれば、多くの人が応募すると思います」

クロムはこれだけ条件が良ければ集まると思っていた。

「ただ、最低限は常識と知識を持っている奴らにしてくれ。そうじゃないとどうしようもないからな」

だがクロムの期待は早くも砕かれてしまった。

「……十人集まるかどうか、一応布告を出しておきます」

「雇ったらその後、この街や近辺、名前と住所と年齢、あと職業も調べる。何で生計を立てているかとかね」

こうしてツルギは最初にやる事と指示を出し終えた。

調査も順調に行われている中、ツルギは早くも次の行動を起こしていた。

「ツルギ様、今日は一体何をするので？」

クロムは街から少し進んだこの場所で、何をするのか分からず聞いた。

もう少し進めば手入れし始めている田畑がある。

「城壁と堀をここに造る……そしたら、獣や盗賊から出る街の被害は少なく出来る。田畑を作る人もすぐに逃げ込めるし、安心して仕事に励めるだろう？」

「確かにそれは助かりますね」

「それに何時魔法使い達が攻めてくるか分からないから、早めに手を打っておきたい」

「……そうですね」

クロムも静かに頷いた。

「ですけどツルギ様、城壁や堀を造るのはかなり大変じゃないですか？」

ノーレはツルギに疑問をぶつけた。

「普通に造ればな」

そう言っつてツルギはエクスカリバーを鞘から引き抜き、地面に振り下ろした。

そうすると地面は切り取られ、一辺と深さが10メートルくらいの四角い穴が出来ていた。

切り取った地面は穴の横にレンガのように積み上げられていく。

「す、凄い！」

クロムはそう呟き呆然としていた。

「ツルギ様今のは!？」

ノーレも驚きの表情をしていた。

「俺は魔法は使えないが、気は使える。エクスカリバーにその気を込めて地面を切り裂いただけさ」

簡単そうに言うツルギだが普通はそう簡単にはいかない。

気を使うにしても、相当量必要になるからだ。

「俺はこれを街の周囲全体に造るから、手の空いている者達は、この地面から切り出したこれを使って、城壁を造ってくれ。魔法使い

達は飛べるらしいが、無いよりはマシだし、変な獣とかは入ってこれなくなるだろうからな」

「分かりました！直ぐに取り掛かります！」

手の空いている者達が急いで動き出した。

「入り口は北と南の二箇所、堀が出来たらとりあえず橋でもかけて、通行はそこからさせるようにしよう」

クロムはそれに頷き、次々と指示を出していく。

ツルギも皆が動き出したのを見て、自分も堀を造っていく。



S i d e   メガロメセンブリア元老院

「『捨てられた街』に送った者達はまだ戻らんのか？」

一人の老人が言葉を発した。

「はい。ですが心配する事でもないのでは？」

「心配などしていない、ただ税金の回収が気になっているだけだ」

全く送った魔法使い達の事など気にしてはいなかった。

この場に居るの者達が気にしているのは、ただ自分達の懐に入ってくるお金の事だけだった。

「好き勝手に遊んでいるのでは？」

「幾らあそこまで距離があると言っても、二月もか？」

集まった者達も流石に二月も戻って来ないのはおかしいと感じ始めた。

「もし遊んでいるのだとしたら、そいつ等はいらないな」

きつぱりと言いつつ放った。

「襲われたと言いつつのは？」

「街の連中にか？」

「それこそ有り得ん。奴等は魔法を使えないのだからな」

選民意識の高い元老院らしい言い方だった。

「だが一応街に誰か送ってみるか……」

「でしたら私の所の駒を送りますよ」

「ほう、どの様な者なのだ？」

「孤児だった兄弟なのですが、兄は魔力が高く、妹は病弱でしてね、妹の治療と引き換えに兄の方が私の手駒として協力する事になったのですよ」

「妹の方は今は？」

「いや、妹の方は開発中の薬を服用し、副作用で死んでしまいましたがね。まあ兄はこの事を知りませんがね」

その事を思い出したのか、静かに笑い出す。

「そうか、まあ薬の開発には必要な犠牲だ」

周囲の者達も何も言わないうでいた。所詮は孤児の事であるし、その薬が完成すればもっと多くの者達が助かるかもしれないと。自称正義の魔法使い達はこれは必要な犠牲と思っている。

「ええ、今はその薬に改良を加えています。それで兄の方ですが特に風の適正が高く、自身の姿や武器を透明にしたりする事が可能で、潜入や暗殺に向いています」

「それは良い、では頼む」

「分かりました」

S i d e O u t

「フェン任務だ」

銀髪で鋭い鷹のような目をしている少年が居た。

「……分かった。この任務が終わったらいい加減妹に会わせてくれ」

「会わせたいのだが未だ体調が優れなくてね」

「……」

「それよりもこれが任務だ」

そう言って一枚の指令書が手渡された。

「この街に行き、調べてくればいいんだな？」

「そうだ。派遣した魔法使い達が戻って来ないのだ。その原因が何か、奴等が唯戻って来ていないだけならいいのだが、恐らくそうではないだろう……恐らくは既に死んでいる可能性も高い。あの街にはそんなことが出来る人間は居ない筈だが、一応調べてみることになった」

「分かった」

フェンは椅子から立ち上がり準備をしに部屋を出て行った。

「……そろそろ潮時かも知れんな」

フェンは自分が妹に会わせない事を怪しんでいる。

(良い駒だったが始末の準備を進めておくか)

男もまた部屋から去っていった。

## 5・フェン(前書き)

連続投稿!

## 5・フェン

ツルギとノーレは兵達と共に訓練所へ来ていた。

兵を募集した所、街から1000人の兵が集まった。

ツルギは兵を鍛えると共に、ノーレも鍛える事になった。

ノーレ自身が「私もツルギ様の為に、自身の想いを貫ける様になりたくらい」と言われ、ツルギは仕方が無く鍛える事になった。

「さて今日も始めるぞ！まずは午前中一杯は街の城壁の周りを走って来い」

何時も通りのメニューを言い、兵士達も流石に慣れたのか、移動して行く。

「さて、ノーレは此処で何時もの通り俺と実戦訓練だ」

「はい！」

二人は素手で殴り合っていく。

「くッ！」

「遅い！もっと相手を良く見ろ！そして予測しろ！」

ツルギは次々とダメージが後に残らないようノーレを殴っていく。

ノーレはそれを捌き続ける。

ノーレは元々才能があったのか、一手一手拳を合わせるだけであつと言う間に成長をしていく。

「はあ！」

ノーレは全身に気を纏い反撃していく。

この気に関してもツルギの見様見真似で何時の間にか会得していた。

「まだ甘い！」

ツルギの蹴りをまともにくらい地面に叩きつけられた。

「ぐあッ！」

だがノーレはそこからゆっくりと立ち上がる。

「最初の頃は直ぐに気絶していたのに、今ではこの一撃でも立ち上がるか……だが午前はこれで終了だ」

ツルギがそう言うとノーレは力が抜けたかのように、地面にへたり込んだ。

「あり……が、とうとう、じつい、ました……」

ノーレは息も絶え絶えで返事を返した。



「さて、ノーレは今日の午後からは勉強……」

ツルギは最後まで言わず、腰の鞘から風王結界を纏わせたエクス  
カリバーを引き抜き何も無い空間を切り裂いた。

「えッ!？」

ノーレはツルギの行き成りの行動に驚きを隠せなかった。

「誰だ……」

ツルギは淡々と冷静に言い放った。

「なぜ分かった？」

行き成り何も無い空間から一人の少年が現われた。

「俺は人より勘がいいんだ。所で此処まで忍び込んで来て何の様な  
?」

「……ここにおよそ二ヶ月以上前に、魔法使い達が来たと思うが知  
らないか？」

「おや、戻っていないのか?途中で何かに襲われたのかも知れない  
な」

「ならこの街の堀や城壁は何だ?それに途中で襲われたとしても山  
賊達に遅れを取るとも思えない……」

「この街は今迄最低限の防備も無かったからな、堀や城壁は新しく

造ったんだよ」

「正直に答える気は無いか……」

「心外だな、正直に話しているんだが」

二人の間に張り詰めた空気が流れていく。

「俺の名前はフェンお前は？」

フェンはゆっくりと構えていく。

「ツルギだ」

ツルギもエクスカリバーを構える。

瞬間、野獣めいた動作でフェンがツルギに飛びかかる。

「手っ取り早く聞き出してやる！」

フェンの奇襲に、ツルギは慌てる事無く落着いて前へと踏み込んだ。  
だ。

突き出されたフェンの腕      その懐に入り込み、関節を固めつ  
つブン投げた。

「甘いッ！」

ドン、と地面に叩きつけられたフェンは、痛みこそ少ないものの  
驚いた表情を浮かべていた。

無理も無い、突っかかっていったかと思ったら唐突に体勢がひっくり返っていたのだから。

……とは言え、フェンも長く裏の仕事をしてきた。

強敵と戦った経験が無い訳ではない。

むしろ、他人より多い方だ。

故に、今しがたの攻撃の手段を理解し、更なる怒りが膨れ上がった。

ツルギの使った投げは、背中から落としたものだ。

つまり分かりやすく言うと、ツルギはこの状況で手加減した。

「この程度では俺からは何も聞けないぞ？」

「舐めるなッ！」

寝転がったまま、透明化させた右手の剣を突き出した。迷う事無く、その刃で顔面を貫こうとして

空気が割れるような、派手な金属音がした。

ツルギの武器      エクスカリバーとの激突だ。

ツルギは後方へと飛び、フェンは地面を蹴って立ち上がった。

「やはりお前には邪心が無いな……」

「俺は妹の為にやらなければならないんだ！この一撃で決める！」

「……成程、読めてきた。来い！俺は二撃。お前の一撃を受け止め、お前を一撃で仕留める」

背筋が、ぞくりとした。

空気が凍ったような感覚に、ノーレがぶるりと身を震わせた。

二人の一挙手一投足を食い入るように見詰めている。

冷たい風が、さっと二人の間に吹いたように見えた。

その刹那。

「……ッ！」

フェンは真っ直ぐ、愚直なまでに真っ直ぐ　突貫した。

狙うは一点、ツルギの心臓。

最初は殺すつもり等無かったが、今ではそうでもしないと勝てないと理解していた。

牽制も何も無い、正真正銘殺害するためだけの一撃。

ここまで研ぎ澄まされた一撃は本人も始めて放つ。

一方のツルギ。

……ゆらりと、腕を動かす。

策も何も無い、フェンにとって恐らく最速の刺突。

ツルギはそれをエクスカリバーで、綺麗に受け流した。

心臓から逸れた見えない刃は、左腕を引き裂く。

赤いルビーのような血が、噴出した。

だが、ツルギは全く動揺しない。

苦痛に顔を歪ませる事も、僅かなりとも後ろに下がる事も、傷口を見ることすらも無く

フェンが驚愕に目を見開く。

ツルギは既に技を開始している。

ツルギが狙うも、フェンと同じくただ一点。

エクスカリバーは既に手放している。

ツルギの目の前には、己の左腕を引き裂いた、見えない剣を持っているフェンの右腕。

それをしっかりと捕らえた。

我流投技 『天槌』

右手首を掴み、足を払い宙に浮かし、身体を勢いよく逆さにする。そのまま地面へ、脳天から叩き落した。

「ガッ………！」

血を吐き出し、全身を痙攣させる。

「……俺の勝ちだな」

エクスカリバーを首筋に突きつける。得意気なニュアンスも、嗜虐の悦びも、勝利への歓喜もそこにはなかった。

むしろ、悲痛ですらあった。ツルギはこの少年が恐らく利用されたであろうと感じていた。だからこそこのままじっとしていると、そんな願いが込められているようにも感じた。

「何で、殺さない……」

「結果死ぬ事を許容するのと、殺しに行くのとでは、また別物だ」

ツルギは少しだけ笑った。

「俺は殺すつもりでやった」

「俺がもしあの一撃を喰らってまだ生きていたとしても、トドメを刺したか？」

「……」

「その一瞬の沈黙が、何より君の人間性を表しているよ。……もういいだろう、フェン？」

「……ここで俺が何も出来ずに帰ったら妹は」

「その事だが、こう聞くのは酷だがその妹は本当に生きているのか？俺はメガロメセンブリアの魔法使い達の横暴さを知っている……奴等は約束を守ったり、善意を与えるような連中じゃない。もしそんな連中だったらこんな街は存在していない」

「……分かっているさ！だが認めたくなかった！妹が死んでいるなんて！」

ノーレは息を呑む。

顔をくしゃくしゃに歪め、悔しい悲しいと呟いていた。

フェンが　　大きく、溜息をついた。

吐き出された息から、まるで何か憑いていたものが抜け落ちたように……フェンの表情は、緩んでいた。

「俺と共に来ないか？」

ツルギが手を差し出す。

「はは……命を狙った相手にここまでしてくれるなんて……だがあいつだけは殺さなくちゃ俺は進めない。それが終われば……」

フェンがツルギの手を握り返す。

突きつけられていたエクスカリバーが、鞘にしまい込まれた。

フェンはゆっくと立ち上がる。

「迷惑をかけた」

「そうか、気をつけるよ」

「ああ、また会おう」

フェンは来た時のように身体を透明化させ去って行った。

「ツルギ様……」

「心配するな、フェンは身も心も強い。それにしてもメガロメセンブリア、何処までも人の神経を逆撫でする国だ」

ツルギはノーレの頭に手を置きながら、メガロメセンブリアへの対策を考えなくてはと考えていた。



## 6・対メガ口戦争（前書き）

連続投稿！

## 6・対メガロ戦争

「ちっ！フェンはまだ帰ってこないのか！」

豪華な部屋で酒を飲みながら、周囲の物に当り散らしていた。

フェンを派遣してから既に一月が経ち、元老院の者達にどうなっているのかと突き上げを喰らっていた。

「あの役立たずめ！戻ってきたら妹の様に薬の実験台にして殺してやる！」

その言葉を放った瞬間、部屋には濃密な殺気が満ちた。

「あ………」

言葉を全く話すことが出来ず、呼吸さえも途切れ途切れでしか出来なかった。

「やはり妹はリンは既に殺されていたか……しかも薬の実験台にされて！」

「ひッ!？」

「貴様は俺がこの手で殺してやる」

フェンが静かに宣言した瞬間、男の右肩はフェンの持っている剣に突き刺されていた。

「ぎゃあああああ！」

醜い叫び声が部屋中に響き渡った。

「喚くな……こんなもので終わると思うなよ？」

静かに宣言した言葉が今は何よりも恐ろしく、この部屋を支配していた。

そして静かにフェンはまた男の身体をゆっくりと何度も切り裂いていく。

「ああ、あああああああああ！？」

絶叫が迸った　　ばしゃばしゃと男の身体が紅に染め上がっていた。

血と、肉と、臓物と、骨　　人体を構成するあらゆる部分が、切り裂かれた。

「これで俺の復讐は終わった。リン……」

フェンは妹の名を呟きその場を去った。

残された部屋は男だった者がバラバラになって辺りは血に染まっていた。

S i d e ツルギ

「フェンか？」

「やっぱり気付かれたか」

フェンは透明化を解除し苦笑を浮かべているが、その表情はどこか清々しいな。

「勘がいいって言ったろう?」

「そうだったな」

「……終わったのか?」

「ああ、これからはツルギ、いやツルギ様に付いて行きます」

俺の前でフェンは頭を下げてきた。

「おいおい、一体如何したんだ?」

「私が前に進めたのはツルギ様の御蔭です。貴方に会えなければ私はきつと前に進めず、あいつの手駒として死んでいたでしょう。だからその恩を返したい」

「そんな大層な事はしていないんだけどな……」

「これは私の意思です。お願いします」

「わかった。これから宜しく頼む」

「はい」

Side Out

フェンがこの街に来てはや数ヶ月。

あれからメガロメセンブリアからの干渉は無くなった。

どうやら元老院の一人が殺された事で、後任人事等、内部に凄  
い混乱が起きていて、此方に気を回す余裕など無いようだ。

此方にとっては都合が良い。

今の内に出来る事を進めていけるのだから。

「フェン、兵の方はどうだ？」

「そうですね、なかなか成長していますよ？何より基礎体力が高いのは驚きですね」

「まあー毎日走らせているし、体力が無きゃ何も出来ないからな」

「そうですね。それにしてもノーレも随分強くなりましたね」

「何時も実戦形式で戦っているし、この街に来ていた犯罪者も殺している。最初は落ち込んでいたみたいだが、今はもう吹っ切れたのか更に成長している」

「特に素手の接近戦や、気を使った戦闘は私以上ですよ」

「ノーレは俺の従者として常について来る立場だからな、強くなつて損は無い」

「そうですね、私も負けなないようにしないと……兵を率いる立場として」

「頼むぞ。元老院は今内部混乱や派閥争い、他の国との小競り合い等でこの街の事には手を出す暇は無いだろう。だからこそ今の内にこの街を国としてやっていける様に手を打たないとな」

「はい」

街は掘りや城壁も完成し、街も活気が始めていた。

商人達もこの街に来るようになり、どんどん豊かになっていく。

魔法が使えない代わりに、この街の人達は工夫したりする事や、技術が高かったりと、他の街に無い独自の物があった。

特にツルギは以前の世界に居たときの知識を使い、街には上下水道を通すようにしたり、今迄街に落ちていた糞尿をきちんと処理し、畑に混ぜたりと今までに無い事を行っていた。

おかげでこの街は商人達から技術の進んだ街として認識され始めていた。



それから七年後……

『捨てられた街』は今では国としてやっていくまでの力を付けた。

ツルギは街を自分達の国、アヴァロンと宣言しメガロメセンブリアとは何も関係ないと各国に通達を出した。

だが勿論メガロメセンブリアはそんな事を容認するはずも無く、今迄内部で争っていたのが嘘のように協力しだし、宣戦布告を出してきた。

「ツルギ様！メガロメセンブリアが軍を率いてこちらに向かってきているとの報告が！」

クロムが急いでツルギの部屋に入って来て報告しだした。

「そうか……フェンを呼んでくれ」

「わかりました！」

急いで部屋を出て行くクロム。

「ツルギ様、出撃ですか？」

フェンは部屋に来るなりそう問うてきた。

「そうだ、フェンは『剣』を率いて敵と戦ってもらおう。『盾』は応国の防備を、此処まで来ることは無いだろうがな。俺はノーレと共に先に遊撃する」

「了解しました」

フェンは頭を下げ静かに去って行った。

そして入れ替わるようにノーレが部屋に入ってきた。

あれから七年たったノーレ・ハインデルクは既に大人の女性へと成長していた。

赤毛の髪に、背丈は高く、真紅の長い髪が、まるで尾を引く炎のようだった。

身体つきも女性らしくなり、強くなくては守れない事を知り、ツルギ以外には苛烈な性格になっていた。

実力もアヴァロンではツルギに次ぐNo.2となりフェンをも超える実力者になった。

「ツルギ様、準備が完了しました」

「そうか、なら俺達は一足早く迎撃に出るか」

「はい」

「よし今日は此処で休息だ！」

メガロメセンブリアから兵を率いてきた隊長が、部下に指示を出している。

「まったく相手も馬鹿な奴らだな、俺達に魔法使いに逆らってくるなんて」

「ははは全くだ。だがそのアヴァロンとか言う国、結構発展しているらしいから金になるものも多いかもしれないぞ？」

「それはいいー！」

周囲でそんな事を笑いながら話し合っていると、突如気弾と斬撃が飛んできた。

「がああ！」

「何だ！？」

「痛てえ！」

「うわああああ！？」

兵士達は大混乱に陥っていた。

そしてメガロメセンブリアの兵達の前に二人の人物がいた。

「何だこの弱さは？貴様らは我々を、魔法を使えない我々を殺すために来たのだろうか？なのにこの脆弱さは何だ劣等共？」

「そう言っただけでやるなノーレ、ただ魔法が使えると言っただけで胡坐をかいてきた奴らが、俺達に勝てる道理等ある訳が無いだろ？」

周囲の兵達は唯呆然と二人を見ていた。

「な、何なんだお前達は！？」

「お前達に名乗っても意味など無いと思うが……一応名乗っておくか。俺はアヴァロンの王、ツルギ・マーフェスだ。こっちが、我が従者ノーレ・ハインデルクだ」

「アヴァロンの王！？貴様が！？」

「ここで貴様を殺せば！」

だがそれを言った瞬間兵士は……

「貴様、誰を殺すだと？」

ノーレに一瞬で殴り殺された。

「おのれえええ！この人数にたった二人だけで勝てると思うな！全員かかれえええ！」

その命令と共に兵達が一斉に杖を向ける。

ツルギとノーレの二人は同時に散開し、メガロメセンブリアの兵達を蹴散らしていく。

まさしくその姿は一騎当千。

ツルギは魔法を弾き、切り裂きながら次々と敵を切り裂く。

ノーレは気を纏わせた拳で魔法を弾いたり逸らしたりしながら、敵を殴り殺す。

敵はますます混乱していく。

そして其処に追い討ちをかける様に、ツルギ達の後方からアヴァロンの軍服を纏った兵達が現われた。

「なッ！？アヴァロンの兵だと！？くッ全軍退け！」

だが命令を下した将兵は、首が胴から一瞬で離れていた。

この光景はメガロメセンブリアの兵達に絶望を与え、散り散りになつて逃げ惑つていく。

「フェンか？」

冷静に戦場を見つめていたツルギは、先程の光景を作り出した人物の名を呟いた。

「はい」

ツルギの前に一瞬にして姿を現した。

「このまま敵を殲滅する。誰一人として逃すな、我が兵達にもこれが戦争だと言つ事を確りと教える」

「了解しました」

敬礼をしてすぐさま戦場に戻つていった。

フェンと入れ替わりにノーレがツルギの元に戻つて来た。

「ツルギ様、あちらは殲滅し終わりました」

「ならば後はフェンに任せよう。後何回か相手を殲滅すれば当分は静かになるだろう」

その後メガロメセンブリアはアヴァロンへ何回か軍を差し向けたが、全てを返り討ちにされかなり兵力を減らされる事になった。

その為ツルギの想像通りに、かなりの戦力を失ったメガロメセンブリアは、アヴァロンに何かをしてくる事は無くなった。そしてこの戦いで生き残った敵兵からツルギはその剣技の冴えから『剣帝』、ノーレはその苛烈な戦闘と、敵の血を浴び、撒き散らしていた事から『鮮血の紅騎士』、そしてフェンは敵にとっては姿を確認できず、知らないうちに殺されている事から、『ファントムキラー幽霊騎士』と呼ばれ、長年恐れられ続ける事になる。



7・鮮血事件（前書き）

まだまだー！

## 7・鮮血事件

メガロメセンブリアがアヴァロンに戦争を仕掛けてから早300年。

アヴァロンは今やどの国よりも技術が高い技術大国へと変わった。

国境辺りでは未だ、メガロメセンブリアや他のメガロメセンブリア側の国との小競り合いは有る物の、概ね平和だった。

だがアヴァロンはメガロメセンブリアでは敵国として認知されており、ツルギにノーレにフェンは不老の化物として懸賞金が掛けられている。

『剣帝』には1500万ドル、『鮮血の紅騎士』には1400万ドル、『幽霊騎士』には1000万ドルと言う高額の値がついていた。

「ツルギ様、やはり国民を攫って行っていたのは、メガロメセンブリア側の周辺諸国でした」

「そうか、流石に国外までは守れないからな……攫われた者はどうなっている？」

「……諜報員からの情報では、どうやら我が国の情報を聞き出す為に薬を大量投与されたらしく、既に息は無いそうです」

「ノーレ……今回の戦いは戦争ではなく虐殺になる。相手に何処の国民に手を出したのか思い知らせる為にな……ついて来るか？」

「はい。ツルギ様の御身を守る事こそ我が使命」

「すまん……では行こう」

後に『鮮血事件』と言われ、魔法世界全体に恐怖をもたらした事件となる。

今、戦場では空前絶後の総力戦と化していた。

いや、殲滅戦と言うべきか。

圧倒的二人の前に押し潰され、スルトークと言う国はもはや陥落寸前であった。

ツルギとノーレの前に、生きて其処から脱する事などまず不可能と言って構わない。

「ぎゃあああああああ！」

「助けッ……！」

「死にたくッ！」

悲鳴が容赦なく鳴り響き、街を人を根こそぎ壊し、殺していく。

あらゆる敵を殺し、殲滅していく。

二人は決して自分達が正義などとは口にしない。

自分達がやっている事は殲滅であり虐殺だ。

だがこれがアヴァロンに必要な事であるからやるのだ。

だから悪と呼ばれようが止めるつもり等微塵も無い。

あらゆる地獄がこの場にはあると言ってもいい。

全てが焼けてしまうような轟音と爆炎が炸裂した。

今のノーレから放たれた気弾と炎で、新たに数人 死体として原型を留めていれば奇跡だ。

殆どが粉微塵の肉塊となって街路上に散らばっている。

ノーレから放たれた炎は、ノーレのアーティファクトである『炎帝の四肢甲』より繰り出された炎である。

ノーレのアーティファクトは送り込んだ気で炎を好きな形に変換する手甲と脚甲だ。

膨大な気を送り込めば、簡単に殲滅系の呪文の威力と同等の炎を作り出し放つ事が可能であり、手甲に炎を纏い接近戦に使ってもいい。炎を剣の形にすることも可能だ。

これにより一気に街は炎の海になる。

「　　っあ、クソつたれがッ！」

ツルギ達を睨み付け罵声を吐き出し、今にも崩れそうな建物の影から飛び出た男の手には魔法の杖。

背後から援護され、幾つもの傷を作りながらようやく有効射程まで辿り着くや、片膝を突いて呪文を唱える。

「レム・レムザ・アルケルス・レムザムリア！来れ雷精 風の精！  
雷を纏いて吹きすさべ 南洋の風！ 雷の暴風！！」

詠唱を終えた魔法使いの杖から強力な雷を纏った暴風がツルギに向かい襲う。

だがそれもツルギのエクスカリバーの一振りにより、切り裂かれた。

それを見た男は杖を放り投げ、手にしたナイフでツルギに襲い掛かる。

援護に廻っていた数人もそれに続く。

これは殲滅戦 どちらも何も余計なことを考えてはいない。

ただ殺し、殺し、殺していく。

正気を失わずにいるのがどれ程難しいことか……

だがツルギもノーレも己の信じるものの為、吼え猛る。

後ろは絶対振り向かず、どこまでもひたすらに狂騒し、血の温度を上げ続ける。

怒声、悲鳴さんざめく中、祈りのようにそれだけ信じて、ツルギ達は兵士達と殺しあう。

もう既に大局的な勝敗は微塵たりとも揺るがない。

スルトークは破滅の板を転がり落ち、アヴァロンに手を出した王族貴族達は、戦火の中に消えていくのみ。

ここに残ったのはその残骸に過ぎない敗者達と、勝者の二人だけ。

S i d e    スルトーク兵

次々と死んで行く兵達。

昨日までは笑い合っていた者達。

共に国を守ろうと誓った者達。

それが今では見るも無残な死体になっている。

まるで夢と思われるような現実。

抵抗は無意味で、救いなど何処にも無い。

この場には最早救われる者達など存在しない。

もはや絶望を通り越し、恨みすらも抱けそうにない。

だがそれでも

「奴らに一太刀を！このまま終われるかああ！確かにこの国の王族貴族は碌でもなかっただろう！だがッ！民に罪は無かったはずだ！それを無慈悲に殺したお前達を許しはしない！」

まだこの心臓は動いている。

まだ魔法を使う事が出来る。

何より動く事が出来る。

このまま終われるわけがない。

王族に対する名誉と忠誠　　今となつては何の価値も無いが、  
少なくとも今のこの状況で、命より軽いものなどあるはずが無い。



事実。

「これだけか……生き残っているのは」

ツルギ達から逃れ、身を隠して合流した仲間の数は、男を入れて三人しか居なかった。

この国を守備していた騎士隊は彼らを残して全滅。もはや、どうにかなる状況ではない。

あの二人はまた、すぐにもやってくるだろう。

「もう……」

「これはいよいよ終わりの終わりが見えてきましたね。俺たちの負けです。アヴァロンに手を出したのが王族貴族達の間違いでしたね」

苦笑気味に話す若者を、男はきつく睨み付けるが、それ以上あえて何も言わなかった。

いや、何も言えなかった。

全くもってその通りなのだから。

俺達の負け。

そう、この戦争は俺達の負けだ。

相手が戦争とと思っているかは、話は別だが……

国の中心が蹂躪され、味方はばたばたと死んでいく。

いずれ自分達も死ぬだろう。

「せめて相手に一矢報いたいですね……このまま何も出来ずに終わるのは我慢ならないですし」

「……貴様、名前は？」

「レイザー・ブレンクリンといいます。あなたは？」

「俺はフォン・ガンレッド。まあ、せめて名前くらいは知ったときた  
いからな。おい」

フォン・ガンレッドは、先程から一言も発さないもう一人の若者  
へと目をやった。

「貴様の名前は？」

「あ……その……」

怯えを隠せない表情で視線を彷徨わせるその若者は、レイザーよ  
りもさらに若い。

おそらくはまだ十代後半くらい。

「自分はサバリス・シュレガーと言います……」

「……そうか」

こんな未来ある子供に……などと言う事をフォンは口にしない。  
言った所で既に意味が無いし、あの二人は敵であるなら子供だからといって容赦しない。

女だ子供だと言って助かるのなら、このような炎の海にはなっていないだろう。

だから、どうせ殺されるならせめて戦って、その果てに。

レイザーはその覚悟を既に決めている様だが、しかしこの少年は

……

「この戦いが終わったら、スルトークは……どうなってしまっんでしょうか？」

「……………」

「僕達の家族や友人は、一体この先……………」

「わからんよ、そんな事は」

「ただ分かっている事は、アヴァロンが戦勝国と言う事だけ」

これまで斜に構えていたレイザーが、一転、苦々しげに吐き捨てた。

「俺達は国の住民の為に戦っているだけなのに。それをあいつら……クソ、舐めやがって」

「戦場とはそう言うものだ……上の行動で下の者達の運命も決まってしまう。王族貴族はアヴァロンに何をしたのかは知らんが……何かとんでもない事をやらかしたのだろうよ。でなければあの国が動くことなどありえんよ」

それでも絶対に降伏などしない。だが、命を棄てて戦っても、すでに決した勝敗は変わらない。

自分にそこまでの力は無い。

そして、このまま負ければ祖国は、そして子孫達は……

せめて逃げ切れた者達がいる事を願うしかない。

非力な一兵卒に出来ることなど最早殆ど何も無い。

それがただ口惜しく、呪わしい。

レイザーの独白に、フォンは何も言えず黙り込む。

「だから俺は」

その言葉を吐いた瞬間に、気弾が近くに着弾していた。

咄嗟に伏せたフォンとサバリスは辛くも難を逃れたが、レイザーはその気弾で頭を吹き飛ばされていた。

「……ちくしょうッ！」

これがつい先程まで、戦って死にたいと言っていた若者の、呆気なさ過ぎる最期だった。

これが現実。

救いや英雄や奇跡などなく、ただ虫けら同然に命が消えていく。

今は何も余計なことを考えてはいけない。

「サバリス、返事をしろ！」

倒壊している建物の陰に転がり込んだフォンは、もう一人の名前を叫んだ。

だが……

再び爆音が辺りに響いた。

それにより吹き飛ばされた少年の上半身が、フォンの足元に転がっていた。

その後景にフォンは力なく崩れ落ちた。

「……ああ……何で僕達はこんな目に」

もはや一分と保たためであろう、サバリスは最期にフォンに向けて質問を問いかけた。

「喋るな、サバリス……」

今こうしている間にあの二人は辺りを蹂躪しているのだろう。

もうサバリスは助からない、例え魔法をかけようとも……

ならば今、軍人であるフォンがやるべき事は決まっている。

「サバリス……先程の問いの答えだ、こんな目にあったのは負けたからだ……弱かったから俺達は悪となり蹂躪されることになったんだ。逆に強ければ例え悪でも正義となる」

それは真理。

なんと残酷で、憎むべき真理。

だが、だからこそこの世界ではそれが正しく正義になる！なってしまう！

ああ、神よ　ならば俺はあなたを！

「そうです……か……次は強く……」

フォンの目の前でサバリスは静かに息を引き取った。

最期は笑って……

「そうだな、レイザー、サバリス」

フォンは苦笑を浮かべる。

「次こそは我々が勝とう！アヴァロンに！そしてこの狂った世界に

「神に」

その言葉と共に二人が居るであろう戦場に戻っていった。

Side Out

「脆い。そして弱すぎる。しよせんは劣等共だったか」

鬱陶しげに吐き棄てるノーレは瓦礫の上に立っている。

その在り様を形容するなら、真紅。

赤と言う赤が彼女を包み込んでいる。

「ノーレ、次へ行くぞ」

その言葉を吐いたツルギは無表情に、だが何かに耐えるようだった。

「はい……ツルギ様……」

ノーレは心の中で、どうかこれ以上無理をし、心を壊さないようにと祈らずにはいらなかった。



後にこのスルトークと同じく関わっていた他の3国も同様に攻め滅ぼされる事となる。

この4国の生き残りはメガロメセンブリアへ亡命する事になり、メガロメセンブリアはこの事件に関して決して関わるなと各国に忠告を行う事となった。

## 8・600年

始めてこの世界に来て約600年程の時が流れた。

その600年の時の中では国を造つたり、戦争をしたりと色々な事があった。

ツルギ自身600年の時が過ぎ、精神的にも成長し、戦闘においては湖の乙女から貰った力も完璧に使いこなせるようになっていた。

そして何時しかアヴァロンは、魔法が使えない者達にとっては、住みやすい国となっていた。

それもその筈、この国の王自身が魔力はあっても魔法は使えないのだから。

「ツルギ様。ヘラス帝国と連合の戦争がついに始まりました」

ノーレ・ハイデルクがそう告げてきた。

ツルギと契約した従者にして、契約した結果不老になった存在。

600年の長い時を共に歩んできた相棒パートナーでもある。

「そうか……」

「別室に待たせている連合からの使者は我々につけと言ってきています」

「我々の国を敵国だと言い、懸賞金をかけているくせに、今更協力だと？それだけはない」

「分かりました。直ぐにそう言い追い返します」

そこに行き成り扉が開かれた。

「使者殿！お戻りください！」

衛兵が一生懸命止めているが、連合の使者はそれを無視して歩みを進める。

「どう言う事だ！」

そして急に怒鳴りだした。

「貴様！此処が何処だか分かっているのか！」

ツルギと話していたノーレが声を荒げたが、ツルギは手でそれを制した。

「これは使者殿どうかしたか？」

「今の話に決まっているだろう！何故我々に協力をしない！元々時を逃れば貴様らはメガロメセンブリアの者……」

だが使者がその言葉を放った瞬間にノーレから途轍もない殺気が放たれた。

「おい劣等、貴様誰に向かって口を聞いている？」

その余りの殺気に使者は震え息も出来ないでいた。

「落着けノーレ」

その言葉と共に殺気は霧散した。

「はっ！申し訳御座いません！」

その言葉と共にノーレはツルギの後ろに控えた。

だがその鋭い視線は使者を射抜いていた。

「使者殿、協力は出来ないと連合に伝えてくれ」

「き、貴様らは連合を敵に回し戦争をするつもりか！」

戦争との言葉を出せば協力をするだろうと思っていた使者は、急に勢いを取り戻した。

その余りの物言いにノーレは直ぐにでも捻り潰そうかと思っていた矢先に、ツルギから声が発せられた。

「貴様らこそ我々と戦争するつもりなのだな？もう我々と戦争をした事を、そして負けた結果を忘れたらしい。それに貴様らは我々の国を普段は敵国、そして我々に懸賞金を掛けているのに味方につけとは、何を考えているのやら」

呆れたようにツルギは首を振った。

「なッ!?嘘をつくな!戦争をしただと!?そんな事は知らないし我々が負けるはずが無い!そちらの懸賞金は我々と常に敵対をしているからだろう!それに魔法使いに本気で使えない者が勝つつもりか!？」

そんな昔の戦争で負けた事等、当時の元老院によって無かった事にされている為、今のメガロメセンブリアの者達は、魔法が使えない者達の国が我々に勝てるはずがないと思っ込んでいます。

「それが本音か……ならば思い出させてやる、戦争だ!」

その言葉が発せられたのと同時に、衛兵が叫んでいる使者を連れて行った。

「ノーレ済まないが戦争の準備を頼む」

「分かりましたツルギ様」

一礼をして去っていくノーレ。

「はぁーこれから忙しくなりそうだ」

一人そう呟いた声が、部屋に響いていた。

S i d e   メセンブリーナ連合

この部屋には連合の各代表達が集まってきた。

そこに使者からアヴァロンとの交渉結果の報告がなされていた。

「愚か者があー!!」

メガロメセンブリアの代表がその使者に怒鳴り声をあげた。

「も、申し訳御座いません!」

今にも土下座をしそうなくらいに頭を深く下げる使者。

「くっ！ヘラス帝国だけではなく、アヴァロンとも戦争をする等…  
…何故こんなことに！」

「メガロメセンブリアの代表、其処まで気にする必要など無いのでは？所詮魔法を使えない者共の国ではありませんか」

他の国の代表がまるで見下すかの様に声をあげた。

「確かに奴らの国は魔法が使えない者達の国だ。だが…：奴らは気を使う戦闘集団を兵に持っている。我々の国と数百年前に戦争をし、我々は敗退した事がある。それだけではない、他にも何百年か前に数力国の国がアヴァロンの国民を攫い、情報を得るために薬を投与し殺した事があった。だがその国々はアヴァロンの王と従者の二人だけで滅ぼされたのだよ。そして跡地には真つ赤な血と崩壊した国の瓦礫しか残っていないかった…：表には出ていな事件だがな…：」

「なっ！？まさか真相が不明だった『鮮血事件』か！？」

「あれはアヴァロンの仕業だったのか！？」

ここに居る代表達は表に出ていなかったこの事件の事は知っていた。  
いた。

「そうだ、それにアヴァロンの王とその従者は不老の化物。特に従者はその苛烈な戦闘から『鮮血の紅騎士』とまで呼ばれている。王に仇名した者は問答無用で血を撒き散らせ死に至らしめると言われている程だ。私も前代表にかの『鮮血の紅騎士』には手を出さなと

言われている。王の方も建国当初は前戦で戦って『剣帝』と呼ばれていたと言われている。そして表には滅多に出てこない『幽霊騎士』こいつらは敵に回したくはなかった」

その話しに各国代表の半分は真剣に聞き入り、もう半分は所詮誇張された昔話だと高をくくっていた。

「どちらにせよもつどうしようもない……各国共アヴァロンの動きにも注意するよつに」

そう言い会議の終わりを告げた。

S i d e O u t



「諸君此処に集まってもらったのはノーレから聞いていると思うが、遂に戦争が始まる。そのため『盾』の部隊は国家防衛を命じる。そして『剣』の部隊は宰相とフェンの指示に従い戦ってくれ。後俺はノーレと共に単独で動くから皆頼むぞ」

「ちよつと待つてください!?!」

そこに小柄な少年の様な男性が待ったをかけた。

「如何したテルメル?」

不思議そうにツルギが問いかけた。

「何不思議そうに如何したテルメル? つじやないでしょう!?! 何で国家最強の部隊『剣』を王では無く、宰相の私が指示するのですか!?!」

小柄なテルメルが怒っても子供が駄々をこねている様にしか見えなかった。だがそれを言うのと更に收拾がつかなくなるほど怒るので言わないでいるが……

「決まっているそれが一番効率が良いからだ。それにフェンも居る」

「しかしですね!？」

「テルメル、安心しろ。私も含め『剣』の者達は強いしお前の事は信頼している」

「お前なら信頼できるから任せるんだ。ではアヴァロンの事は頼む」  
二人にそう言われると何も言えなくなるテルメルは溜息を吐き出した。

「……了解しました。無事の帰還をお待ちしております」

Side 帝国兵指揮官

「くそッ！」

最悪の状況だ……仲間はかなり的人数がやられ、上の者達との連絡も繋がらない。勿論この状況では増援や物資も期待出来ないだろう。

そこに疲弊した状況を知ったのか連合が動き出した。

たった三日だぞ！？

三日前にたった5人の魔法使いが連合から投入され、このような状況に陥ったのは！

遂には前線は崩されこそも直ぐにその5人がやって来て陥落するだろう。

一人でも多くの将兵を帝国へと帰してやりたい……皆にも私にも家族が居るのだから……

「全軍撤退を開始しろ！ここはもう持たない！」

「何を言っている！勝手に撤退など！戦線の維持は帝国の、陛下の命令であるぞ！」

くツ！この無能な上官さえ居なければここまで無駄に犠牲を出すことは無かったはずなのに！

「ですがもう既に前線も破られ、此方には援軍も無い！撤退するしかありません！」

「ここは帝国にとっても重要地点なのだ！陛下が増援を送ってくれ！それまで戦線を維持したまえ！」

くツ！？前線に出たことの無い貴様に何が分かる！

増援など誰が敵に囲まれ孤立した軍に送るものか！何処まで無能を晒すつもりだ！

それにこの戦争は始まりからおかしかった……

それに……

「分かったら前線に行きたまえ」

「くツ！」

だがそこに一人の兵が急いで入って来た。

「申し上げます！前線に所属不明の二人組が現われ連合を押し返しています！」

この報告に希望を見出した瞬間でもあった。



## 9 ・大分裂戦争（前書き）

修正しましたー！

## 9・大分裂戦争

戦場はまさしく血の雨が降っていた。

魔法や銃弾が人を貫き血や臓物が飛び散っている。

身体が焼け爛れていたり、炭になっている部分もある。

既に人の原型が無い者達も居る。

まさしく今この場所は地獄絵図だった。

S i d e 赤き翼

「これで大体は片がつきましたか」

「当たり前だろ？俺様が居るんだぜ？」

「まったく、お前はすぐ調子に乗る」

せつかく帝国兵を撃退したって言うのに詠春は口五月蠅いぜ。

「ナギ！？退くんじゃ！何か来るぞ！？」

一体なんだって言うんだ！？さっき迄奴らは何も出来ずに居たはずだぞ！？

師匠は一体何を……！？

だが其処に俺達の居るグレートブリッジの中央部に極大な気の塊が放たれ、連合軍諸共俺達を吹き飛ばす。

「おいおい何だって言うんだ！？とんでもないぞこの気を放った奴  
！？」

「皆さん無事ですか？」



アルが周りにいる皆の無事を確認している。

「何とか大丈夫じゃ……………」

「今のは一体？」

師匠に詠春も何とも無い様だな。

「あーまったくツ！まるで師匠の攻撃のようだったぜ！」

ジャックの師匠？は知らないがあいつも無事の様だ。

「どうやらあの二人組みが放ったようですね」

「あの二人組みの女性の方の服装……………アヴァロンの軍服じゃ、それにあの女性の赤髪……………まさか『鮮血の紅騎士』？なら男の方は『剣帝』になるが……………だとしたらやばいのう……………」

お師匠がやばい何て言うのは珍しいな……………

「まさかアヴァロンの方々が出てくるとは……………」

アルも何か深刻そうな顔をしてるし。

だが何時もなら一番に突っかかっていくラカンが妙に静かなのが気になった。

振り向いてみると冷や汗をダラダラと、もう引くくらいに流していた。

「し、師匠」

ジャックの師匠って……おいおいマジかよ？

だが強いなら戦ってみてえ！

Side Out

「ツルギ様。今の気弾で主要戦力は奪いました。残りは『紅き翼』と呼ばれる五人だけです。が、今迄の者達とは実力は違つようですし、その中の一人は私が昔少しの間育てた馬鹿弟子のようです」

「珍しいなノーレが弟子を取るなんて？」

「ツルギ様から頂いた休暇中の暇潰しで偶々育てまして……」

そんな話しをしていると二人の下に行き成り雷の暴風が迫ってきていた。

「ツルギ様に向かって魔法を放つなど……この劣等が！」

その言葉と共に拳から気弾が発射され雷の暴風を相殺させた。

「なツ！？」

だがノーレは驚いている相手の隙を突き、一瞬で懐に瞬動で潜り込み側頭部へ蹴りを放った。

「ぐあ！？」

ノーレの蹴りで残りの四人が居る所までナギは吹っ飛んで行った。

そして四人の所に静かに歩いて行く二人組み。

アヴァロンの王ツルギと従者のノーレ。

「馬鹿弟子……これは如何言う事だ？」

「い、いや師匠これはだな……」

「まさか敵対するのかこの私に？この紅騎士に？もしそうなら馬鹿弟子……再び貴様に教育を施さねばならなくなるな」

「ち、違うんだ師匠！？」

修行時代の事を思い出し慌てるラカン。

「やはり紅騎士じゃったか……」

「ふふふ、ラカンもとんでもない人の弟子だったのですね」

「ジャック！何怖気づいているんだ！？そこの二人、強いなら俺と戦え！」

蹴り飛ばされていたナギは何でもないように起き上がり、再び戦闘体勢に入った。

「やめるナギ！男の方は知らないが、女の方！俺の師匠はやばいんだ！」

「うるせえ！くらえ！一来れ、虚空の雷、薙ぎ払え 雷の斧！」

そんなラカンの忠告を無視してナギは雷の斧をノーレに向けて放つ。

「よくぞ私相手に吼えたな劣等！アデアット！『炎帝の四肢甲』」

其処には両腕に手甲を、両足には脚甲のアーティファクト着けたノーレが居た。

膨大な気を手甲に送り込むと手甲は燃え上がり、ノーレはその膨大な炎をナギに放った。

その炎は雷の斧を相殺し、ナギの身体にはノーレの拳が入る。

「ぐあ……………」

「どうした劣等？この程度か？」

「くツ！まだまだ！俺様はナギ・スプリングフィールド様だぜ！」

ナギはそう言い、瞬動でノーレに近づき接近戦を始めた。

「あのアホ……………」

ラカンは額に手を置き呟いた。

「如何したのですラカン？」

アルビレオがラカンに問いかけた。

「俺の師匠は接近戦が一番強い。てかやばい。何せ俺に戦闘の基礎を仕込んだんだからな。昔は何時も殴られ蹴られボコボコにされていたからなー」

「貴方がそうだったのなら確かに……………」

今現在彼らの目の前でナギとノーレは殴り合っているが、ノーレは全てを紙一重でかわし、ナギには的確にダメージを与えていた。

それは長い年月研鑽生きてきた者だけが出来る芸当だった。

「くそがあー！」

ナギは自分の攻撃がまるで水に流されるがごとく悉くかわされ、自分には確実に拳が当てられている事に苛立ちを隠せないでいた。

「確かに貴様は強い。その膨大な魔力に気、瞬動等も使えるみたいだしな、だが！それだけでは勝てない者が居る事を知れ！」

一瞬の交差でナギの身体には数十発の打撃が打ち込まれた。

「ほう……私の『乱撃』を受けながらも、最後の最後に私に一撃入れたか……見事だ」

ノーレの左腕部分の軍服の一部が破れていた。

最後の攻撃でナギは崩れ落ち、ラカン以外の人間から戦意が放たれた。

「まさかナギがやられるとは思いませんでしたね」

「そうじゃのう……」

「二人ともそんな事を言っている場合じゃないぞ」

アルとゼクトと詠春の三人はノーレを取り囲った。

だが、

「ノーレばかりを注意してて良いのか？」

その言葉が聞こえて来たのと同時に 詠春が風王鉄槌ストライク・エアによって吹き飛ばされていた。

「「なッ!?!」」

そこには見えない何かを構えているツルギが居た。

「くッ!?!まさか剣帝迄がこの戦争に出て来るとは!?!」

「連合に喧嘩を売られたのでね、さて終わりにしよう!」

そう言いノーレはゼクトへ向かい、ツルギはアルビレオへ向かって行った。

だが幾ら抵抗しようと二人の猛攻を凌げず倒れふす結果となった。

「さて馬鹿弟子、貴様はどうする?」

「俺が師匠と敵対する訳無いじゃないっすかー」

「ふむ……良いだろうっお前だけは見逃してやる」

その言葉にラカンは焦った。

「師匠！頼む！あいつらも見逃してくれ！」

ラカンは必至になってノーレに頼み込むが……

「阿呆が、ツルギ様に魔法を放った劣等を生かしておく訳がないだろっ」

そしてノーレは止めを刺す為にナギ達の方を向くと、何時の間にかアルビレオとゼクトが気絶から復活しており、ナギと詠春を背負い転移魔法で去って行った。

「ちッ！馬鹿弟子のせいで逃がしたではないか！」

ノーレの拳がラカンの顔に突き刺さった。

「へぶッ!？」

ラカンはノーレに殴られ吹っ飛んでいった。

だがあまり堪えたようには見え、鼻から血を流している戻って来る事意外は普通の姿だった。

「落ち着けノーレ、過ぎた事は仕方が無い」

「はッ！申し訳御座いません！」

ノーレはツルギに頭を下げた。

そしてそこに戻ってきたラカンがノーレ達に質問をした。



「そう言えば師匠達はヘラス帝国側なんすか？」

「いや違う。あくまで第三者的な立場だ。ヘラス帝国が此方に攻撃をしてこない限りは何もしない。だがヘラス帝国に負けてもらっても困るからこうやって出張ってきている」

「所で師匠の隣の人はもしかして……」

「そうだ。我が主にして我が国の王ツルギ様だ」

「王が戦場に来てもいいんすか？」

ラカンがツルギに当然の疑問を聞いた。

「ノーレが居れば何も身の安全に問題は無いさ」

「ハッ！必ず御身をお守りいたします！」

ラカンは確かに師匠が居れば身の安全は問題ないだろうなあと遠い目をしていた。

「そう言うわけだジャック・ラカン、あいつ等に言っておいてくれ。次に敵として会った時には逃がしはしないと」

「まあ恐らく聞く耳持たないと……」

ツルギの言葉にラカンは伝えた時のナギの行動が思い浮かんだ。た。

「ではな馬鹿弟子」

そう言い脚甲にとんでもない気を纏わせ膨大な炎を出し、ノーレはグレートブリッジを踏み抜いた。

「んな!？」

ラカンはずぐさまその場を全力で離れた。

その後には完璧に破壊されたグレートブリッジしか残っていないかった。

## 10・グレートブリッジ戦後（前書き）

結局スブラヴじゃなくこちらを書いてしまいました。

## 10・グレートブリッジ戦後

Side ナギ

俺達はグレートブリッジから帝国兵を撤退させた事により、一気に名声が上がった。

だが俺達の中に喜んでいるのは一人もいない。

いや、ジャックだけは何も感じていないかも知れないが……

あの二人に負けたうえに、橋も破壊された。

そのせいで皆の表情が暗い……

それに俺も今迄負けた事なんて一度も無かった……だけどあの女には何も出来ずに負けた。

ジャックの奴は師匠に一撃入れただけでも十分だとか言っていたが納得できるはずが無い！

くそッ！

「ふう〜やれやれじゃ……まさかあそこまで『剣帝』と『鮮血の紅騎士』が強いとはのう」

「全くです。チートであるナギにあそこまで圧倒するとは……もうなんと行っていいか分かりませんね」

「それにこうやって全員生きてるのは手加減されたからだしの…」

「俺もサムライマスター何て呼ばれているが剣帝に一撃でやられてしまったしな……」

「まあまあお前らは良くやったさ……師匠相手に手加減されたとはいえ生き残ったんだからな。特にナギは最後の『乱撃』をくらって身体がいけなかったただけでも十分だぜ？」

「乱撃？」

俺が最後にくらったあれか！

「おう、普通の奴があれをくらったら原型を留めないほどグチャグチャになるか、最低でも血を撒き散らす結果になるほどの攻撃なんだぜ？」

確かにとんでもないほどの衝撃が身体を貫いたからな……

「まあーまたその内、違う戦場で会うことになるとは思っが……」

だとしたら沈んでられねえーな！次は負けねえ！

Side Out

S i d e 連合指揮官

「よし帝国兵が撤退している今がチャンスだ！追撃をかけるぞ！」

私の命令と共に部下の兵が動こうとした瞬間に数多の斬撃が飛んで来た。

その斬撃は数多くの連合の兵を切り裂き、部下達は混乱を引き起こしていく。

「何だ！？何が起きている！？誰か報告しろ！」

私も余りの事に動揺を隠せないでいた。

「報告します！我が軍の右舷後方よりアヴァロンの軍服を纏った者達が現われました！」

「何だと！？」

その報告に私はは暫し戸惑いを見せてしまった。

上からは注意しろとしか言われていないが、どちらにしろ敵なら討つまでだ！

直ぐに正気に戻り部下に指示を下した。

「奴らは魔法が使えん！遠距離から魔法を撃て！魔法障壁とかは張れない筈だ、一気に殲滅するぞ！」

「了解しました！」

「馬鹿な……我々が！魔法を使える我々が！魔法を使えない者達に敗れると言つのか！」

私は今、戦場に圧倒的な光景を作り出しているアヴァロン兵を見ている。

私達の放つ魔法は、次々と奴らの剣によって切り裂かれ、連合の兵達は無力化されていく。

上級魔法を放つても、既に瞬動でその場所には居らず、気付いたときには接近を許していた。

普段私達魔法使いは魔法剣士タイプではない限り、接近戦などそうは出来はしない。

その為圧倒的に接近戦が強いアヴァロンの兵に、連合はなすすべ無くやられていく。

「隊長！一体如何すr……」

私の後ろで叫んでいた部下の首が行き成り宙を舞った。



何も見えず何も感じなかった……一体何が。

混乱していると突然自分の目の前に男の姿が現われた。

「き、貴様は！」

「お前達からは一応『ファントムキラー幽霊騎士』何て呼ばれているな」

「貴様が！？ならば先程の攻撃も！？」

「よりもよつて『ファントムキラー幽霊騎士』が来るとは……確か『ファントムキラー幽霊騎士』は姿も武器も消せると聞いた事がある……」「アデアット『伸縮八刃』」  
そう考えていた私の視界が宙を舞っていた。

「相手に気付かれずに命を断つからこそ『ファントムキラー幽霊騎士』だ。まあツルギ様とノーレには通用しないがな」

『ファントムキラー幽霊騎士』の眩きを最期に私の意識は消え去った。

Side Out

連合の兵達は勘違いをしていた。確かにアヴァロンの住人は魔法を使えない者達だ。だが、ここにいる者達はアヴァロンの中でも屈指の部隊『剣』である。あのノーレとフェンが一人一人鍛えた剛の者達。その者達に魔法が使えない事など些細な問題だった。何故なら彼らは弱い魔法くらいなら切り裂くのだから。

もしこの事を正しく理解していたのなら、被害は此処までにはならなかっただろう。

「フェン隊長、殲滅完了です」

「よし、怪我の治療を行いつつ次に打って出るぞ」

「理解」

S i d e   メセンブリーナ連合

此処に集まった者達の表情は皆固い……

「くそッ！アヴァロンの連中め！……」

拳を机に叩きつける。

「あちらこちらで我々連合の兵達が殺されています。このままではかなり拙い事態に……」

「それだけではない！グレートブリッジも破壊され、そこに居た主力兵達と紅き翼もやられたと言うではないか！」

「しかも赤き翼を倒したというのは……」

「そうだ、『鮮血の紅騎士』と『剣帝』だ」

「もはや手が着けられん……アヴァロン本国に攻め入れれば少しは混乱を誘えるか？」

「いや、無理だろう……奴らの国は、今攻めてきている『剣』と言う集団と、国家防衛を主とする『盾』がある」

「どちらにせよ最早止まれん！やるしかない！」

Side Out

グレートブリッジでの戦いから数日が経ち、ツルギとノーレは現在拠点の一つに居た

「ノーレ、現在帝国と連合はどうなっている？」

「はい、現在帝国と連合は帝国が優勢な情勢です」

ツルギは腕を組み頷いた。

「まあアヴァロンも連合にかなりの損害を与えているからな……そう言えばノーレの弟子が居る紅き翼はどうなっているんだ？」

「それが、紅き翼は連合に反逆者として指名手配されたそうです」

「はい？」

意味が分からないとツルギは目を見開いて驚いていた。

「どうやらマクギル元老院議員を暗殺しようとしたらしいのですが……」

「あいつ等の性格からして、そんな事はしないだろう」

「はい、私もそう思います」

ツルギもノーレも紅き翼が暗殺なんてまねを行っなんて思っていなかったし、それに暗殺に向いている性格の奴も一人も居なさそうだった。さらに紅き翼にはノーレが自身が鍛え上げたラカンがいるのだ。あの馬鹿弟子がそんな事をする筈が無いとノーレは確信している……が、まあもし本当にそんな事をしていたらノーレはラカンを問答無用で抹殺するつもりでもあった。

「と、なると裏で動いている奴らが居るな……連合の暗部か帝国の暗部……それか『完全なる世界』か」

「『完全なる世界』ですか、この戦争でもちらほら動いていると報告も挙がってきています。そう言えば何十年前かに我々に接触してきていましたね」

「ああ、興味が無かったから互いに干渉をしない事になったんだが、此処で『完全なる世界』の連中が動いているとなると面倒くさい事になりそうだな……」

「確かにそうですね、我々に会いに来たアーウェルンクスと名乗った男も中々の実力者な感じでしたからね」

ノーレは過去の事を思い出していた。

「まあ敵となるなら切り裂くだけだ」

「勿論です」

「さて、次は如何動くかだな……」

ツルギは腕を組みながら悩んでいると、ノーレから提案が出された。

「それでしたら帝国が奪還を掲げているウエスペルタイアへ行くのは如何でしょう？それにあそこには『黄昏の姫巫女』と言う防壁が居るらしいですし、それには興味があります」

ノーレが珍しく興味があると言った事にツルギは内心驚いていた。

そしてツルギ自身も『黄昏の姫巫女』に興味を沸いた。

「『黄昏の姫巫女』か……よし！行ってみるか」

こうして二人はウエスペルタイアへ行くことになった。

## 10・グレートブリッジ戦後（後書き）

フェンのアーティファクト

『伸縮八刃』

名前の通り伸縮自在の刃を八本作り出すことが可能で、更に刃の鋭さから形状も変えることが可能。フェン自身の透明になる事が出来る魔法を纏わせることにより更に凶悪な事になったアーティファクトである。



11・外伝 ラカンとノーレ1（前書き）

初の外伝、ラカンとノーレの出会い編です！後9・10話を修正したので読み直してみてください。

## 11・外伝 ラカンとノーレ1

Side 赤き翼

「ジャック！紅騎士の事教えてくれよ！お前あいつに鍛えられたんだろ？」

「それは私も気になりますね」

「俺も気になるな」

「わしもじゃ」

全員が興味心身にラカンを見る。

「ああー俺としては思い出さたくない過去なんだが……」

「知るか！教えやがれ！」

「だあーわかったよ、そうだなーあれは俺がまだ弱っちい頃だ」

回想

Side ラカン

「くそ、今日も負けた！」

俺は弱い……だがいつか自由を掴むため維持でも強くなってやる！

「ジャック・ラカン出る！お前は買われた」

「はあ？俺を買っただと？一体どこの物好きだ？

俺を買った奴が居るといふ部屋に連れて行かれると、真っ赤な炎の様な髪の女が居た。

「来たか」

その吐かれた言葉を一言聞いただけで俺は雷が全身に走った感覚がした。

この女は間違いなく強者だ！

それも絶対並みの強者じゃねえ！

だが一体何故俺を……

「あんたが俺を買ったのか？」

「そうだ、私はノーレ・ハインデルク。単刀直入に聞く、強くなり  
たいか？」

「はっそんなの聞かれるまでもねえ！

「当たり前だ！」

「ならついて来い。私が強くしてやる」

それから俺達は街から出て少し離れた更地についた。

「なああんた何で俺を買ったんだ？」

「目が死んでいなかった。何より強くなると言う意思と才能があったからだ」

確かに意思はあったが……

「それじゃ直ぐに始めるぞ」

そう言われた瞬間女の姿が消え俺は殴り飛ばされていた。

「ぐあッ!？」

「遅い!常に周囲に気を配れ!」

その前に反応できねえ!

それにこれだけの速さに対応できたら俺は今迄負けてねえ!

「考え事とは余裕だな!ほら、直ぐに体勢を立て直せ!」

無理だ!一撃一撃が重過ぎる!俺が今迄戦ってきた相手は一体なんだっただんだ!

「避けないと死ぬぞ!」

そう言われ瞬間的に横に跳ぶと、一気に地面が抉れていった。

これは本気で殺される……！

それから数時間、俺はぼこぼこにされて今日の修業と言つ名のいじめは終わりを迎えた。

「こんなものか、まあ先程の準備運動である程度お前の事はわかった。明日からは基礎を徹底的にやるぞ」

あれが準備運動かよ……じゃあ修行はどれだけ厳しいんだ？

でも文句を言ったら吹き飛ばされるんだろうな……

「……わかつたぜ師匠」

翌日、早朝から蹴り起こされ、正拳突きや蹴りの放ち方を教えられやらされた。

その後はまた師匠との組み手。

だがあれは組み手じゃなくすでに実戦だ……

瞬時に判断しないと殺される。

「甘いぞ馬鹿弟子！」

師匠は俺の側頭部に蹴りを放ってきやがった。

俺は何とか防御に成功するが、それでもかなり吹っ飛ばされる。

「師匠が強すぎるんですって！」

「手加減をかなりしてやっているだろう」

もう何を言っても無駄だ……なんて傍若無人なんだ。

「ほら、次は気弾を飛ばすぞ？避けてみせろ！」

うおおおおおー！……………！洒落にならん！死ぬー！……………！

気弾で爆撃され辺りはクレータが沢山出来上がっていた。

「待った師匠！待ってくれ！」

「言い訳など聞かん！生き延びてみる！」

無茶言うな！

あつ目の前に気弾が……俺、死んだな……

「……死んだか？馬鹿弟子？……………何とか生きているな。  
今日はこれまでだゆっくり休め」

俺は動けずに屍のようになってるのに、踏み付けて生きてるか確認するなんて、何て優しさのかけらも無い師匠なんだ。

しかも師匠にとっては生きていれば手加減だから堪らない……

早く寝ないと明日こそ死んでしまっ……

S i d e  
O u t

S i d e  
N o t e

私は今帝国の奴隷剣闘士同士の戦いを見ている。

そして闘技場で戦っているのは少年だった。

その少年はまだまだ弱いが目が良い。

それに才能も恐らくある。

丁度ツルギ様から一年の休暇を言い渡されていたし、育ててみるのもいいか。



あれから馬鹿弟子を育てて早くも半年が経った。

「馬鹿弟子！動きが遅いぞ！」

「ぎゃーーーーーー！！？師匠死ぬって！洒落にならないってそれは！？」

私は気弾で馬鹿弟子を攻撃しているが、あいつは毎日死ぬ死ぬ言いながら、紙一重でかわしている。

確かに私は手加減をかなりしているが、それでも簡単には避けられないように気弾で爆撃している。

今この瞬間にも馬鹿弟子は成長しているらしい。

やはり私の目に狂いは無かったようだ。

「ふむ、今日は傷が少ないな？簡単にし過ぎたか？」

「師匠……何故そう言う結論になるんだ……俺の努力を認めてくれ……」

馬鹿弟子は凄まじいスピードで成長している。

やはり思ったとおり私と相性が良いみたいで、真綿に水が染み込むが如く私の扱う拳と蹴りを扱う戦闘スタイルを自分の物にしている。

アヴァロンの誇る『剣』でさえ此処まで飲み込みの早い者は居なかった。

これなら将来アヴァロンの役に立つ事もあるだろう。

「馬鹿弟子！さっさと今日のノルマの基礎をこなせ！」

「師匠、今更基礎をやって意味あるのか？」

こいつの欠点は阿呆な所だな……たかだか半年基礎をやっただけで完璧に身につくものか！

「阿呆が！強い者達は基礎を疎かにはしていない。お前は私に拳や蹴りで勝てるのか？」

「うぐツ！？確かに師匠の蹴りや拳は反則に近い威力だからな」

「だったら文句を言わずやれ！」

「へぶツ！？」

馬鹿弟子は私に殴られ吹っ飛んでいったが、最初の頃と違って瞬時に気でガードしていた為無傷だ。

「さっさと終わらせる」

「うーす」

いい加減な返事だが、修行時は真剣な顔つきでやりだすあたり、こいつは弟子として当たりだな。

Side Out

「さて馬鹿弟子……お前に修行を付け始めてそろそろ一年になる」

ノーレは腕組をしながらラカンへ話しかける。

「そつっすねー今なら大抵の奴には負けない自信があるぜ師匠！」

「ほう、ならば卒業試験を行おう」

「卒業試験？」

「私の国では新兵の部下達に必ず一定の試験を課すのだ」

「成程……それで内容は？」

「私と本気で戦い納得させてみる！」

そう言い放った瞬間ノーレの全身から気が噴出した。

ラカンもノーレのその姿を見た瞬間、自身も気を身体から噴出させた。

それでもラカンは全身から冷や汗が出て止まらなかった。

今ラカンの目の前に居るのは絶対的強者。

そして始めてみるであろう、全力ではないが本気の姿。

だがラカンは内心喜びも感じていた。

やっと師匠に認められそうだと言う事に。

「さあ来るがいい、全力で来ないと死ぬぞ？」

ノーレのその言葉と共にラカンは全力でノーレへ踏み込んで行った。

それはまさしく迅雷　間合いに踏み込んだラカンの拳が放たれる。

元より自分より格上の相手に隙を窺うなど、ラカンの意中には存在しない。

即ちそれが意味する事は真つ向からぶつかり斃すと言う事だ。

ノーレ・ハインデルクと戦う為にはその壁を乗り越えなければいけなかった。

何よりラカンの本能が待ちや受けに回ればその瞬間に殺されると悟っていた。

闇に飛び込む決意と覚悟が無くして戦える相手ではない。

ラカンから放たれた一撃は、ノーレの鼻先を掠めて空を切る。

そのまま後退するノーレに対し、ラカンは全力で追い縋って行く。

「言われるまでも無く全力中の全力だあ—————！」

ラカンの連続する拳と蹴り。

苛烈にして容赦なく、しかし何処かノーレにも似た攻撃。

この一年、ノーレによる弛まぬ練磨と積み上げられた技巧。

何より戦場を知っているノーレ本人との組み手と言う名の殺し合  
い。

既にそれは強者と言われる者達の技と大差が無い。

しかし、にも拘らず総ての拳や蹴りは空を切った。

先程から後退するのみのノーレは一見して劣勢のように思えるが、未だ腕組みをしたままであり余裕の態度を崩さない。

「この一年貴様の拳は、腐るほど見てきた」

つまり経験則。

弟子の技も癖も知らぬことなど何も無い。

一年も共に朝から晩まで修行を課してきたのだから。

「何よりこの程度の速さなら『ファントムキラー幽霊騎士』で見慣れている」

アヴァロンではフェンとノーレは互いに腕を鈍らせないようによく模擬戦等をしていた。

そして武器も己自信も消すことの出来るフェンの攻撃を捌かなくてはいけないのだから、この程度の攻撃をノーレが捌けぬわけが無いのだ。

「さて、そろそろ此方からも行くぞ」

「ッ!？」

ノーレは腕組をとき、手に気を収束させた。

「ちッ!師匠お得意の爆撃か!」

至近距離から放たれる気弾の嵐。

打ち落とせる数でもないし、何より距離でもない。

即座に踏み込みを切り返し、真横に飛んで弾幕から逃れ出た。

辺りは地面は粉々に四散して見る影も無い。

「そつだ、この程度避けてもらわんな！」

一瞬にして十メートル以上距離を離されたラカンに、ノーレは更に数十を超える気弾を放つ。

「くそがッ!？」

ラカンはそう言いながらもかわせないと悟ったのか真つ直ぐ気を全身に纏いながら突っ込んで来る。

だが、迫るラカンの足に合わせて、ノーレもまた踏み込んでいた。

速度はそれ程のものではない。

だがまさに虚を衝くタイミング。

十メートル先の標的を斃す為に駆けるラカンに、攻撃開始地点を三メートル分早めさせる。

その誤差は、なまじ早いだけに修正不可能。

「つぁアッ！」

拳を振り上げかけた中途半端な状態で、ほぼ無防備のまま側頭部



を蹴り上げられた。

さらには運動エネルギーにノーレの人外な怪力が乗った蹴り技の破壊力は、もはや言葉にもならない。

弾き飛ばされたラカンは地面を転がって行き、死ぬことはないにしても、甚大なダメージを被ったのは確実だ。

「未熟だよ、貴様は」

未だ粉塵立ち込める場所に向けて、再び両手に気を収束させる。

「立っていッ！」

そして両拳から放たれる気弾。

だがラカンは己も膨大な気を拳に纏い何とか弾いた。

「そうだ、それでいい。そうでなくてはならん！ 来い！」

叱咤する声に応えるかのごとく、粉塵を突き破ってラカンが駆けてくる。

ラカンのその目は幾ら傷だらけになろうとも、未だに輝きを失わない。

斃れてたまるかと一直線にラカンは師匠であるノーレを見据えている。

嵐のような気弾の速射すらも、ラカンの疾走を止められない。

最小限の動きで気弾を弾きながら、再び道を切り開いて肉迫していく。

「やるじゃないか、そうだ限界を超えて来い！」

ノーレとラカン、二人の戦いは加速していく。

## 12・外伝 ラカンとノーレ2

二人が戦い始めて数時間。

駆けるラカンの拳がノーレと交差し捉える。

ついに此処に来てようやく一矢、遙か雲の上である師匠へ報いることが出来た。

ラカンは拳に確かな手応えを感じつつ、振り返った。

「……ふむ」

裂かれた頬を押さえながら、低く呟くノーレ。

そのまま感慨深げに目を細め、手袋に付いた血を眺めている。

「見事だ、貴様で四人目だ」

ノーレが出血を起こすほどの怪我を負ったのはツルギ、フェン、そしてツルギの頼みで旧世界を色々飛び回っているもう一人くらいだ。

「これを持って貴様の卒業試験は合格としよう。そして、誇れ。たいした戦果だ」

「はは……やっつと一撃か……」

だがそれでも現実には頬を裂いただけだった。

頬などいくら裂こうとも、赤ん坊すら殺せない。

「ふん、高々一年で私の領域に來られてたまるか」

ノーレは攻も、防も、走も優れている。

そしてそれを忠実に使いこなしているからこそ、ノーレに欠点と  
言う欠点は無い。

だからこそノーレは強く、ラカンはまだ届かない。

「確かにそれはそうっすね、にしても幾ら戦っても隙が少しも出来  
やしない。それにもし此処で誇ったら馬鹿者がとか言われるに決ま  
っているし」

「馬鹿弟子、どうも貴様は私を極度の嗜虐家だとも思っている節  
があるが……そんなことはない。公正かつ冷静に見て、評価できる  
ものに評価は惜しまん。辛辣に見えるのは、つまらん輩が多すぎる  
からだ」

「はッ師匠から見たら誰しもつまらない輩に見えるに決まっている  
じゃないっすか」

ノーレは失笑した。

「何とでも言え。それで如何する？ここで終わるか？それとも最後  
までやるか？」

今、二人の距離は二十メートル近く開いている。

これは完全に飛び道具の間合いだ。

「はッ！そんなの決まっている！」

「その身体でよくやる」

そう言った瞬間互いに気を纏い超速の弾丸の様に駆ける。

ノーレは刹那もかけず間合いに踏み込み、ラカンの肩を手刀で裂いた。

「ぐうッ！」

そしてそのまま二撃目が太腿を。

ノーレの手刀による斬撃が網目の様な軌跡を描き、ラカンに向けられていく。

ラカンもやられているだけではなく、拳をノーレに向ける。

だが未だに有効打はなく、かわされていく。

だが、それでも今この限界の戦いで成長をするラカン。

徐々に、そして少しずつノーレに掠りだす。

「ふふふ、はぁッはッはッはッ！」

にも関わらずノーレは焦りも怒りも感じず、実に楽しそうにして

いる。

彼女の気性からして屈辱を感じているはずなのだ。

「いいぞ馬鹿弟子！お前は気付いていないだろうが、今のお前は一秒一秒確実に成長している！こんな事は私自身長い時を生きてきて始めて見たぞ！」

ノーレはそれはもう楽しくて堪らないと声を上げ笑っている。

ラカンは拳で突き、払い、そして蹴り上げる。手は一瞬たりとも休めてはいないが、段々と当たらなくなってきている。

そしてラカンの拳を掻い潜り、ノーレはラカンの横をすり抜けた。

「乱撃」

その際にラカンの全身に拳の嵐が叩き込まれラカンは血を吐き出した。

「がふッ!?!」

静かに崩れるラカン。

「見事だったよ馬鹿弟子、いや、ジャック・ラカン。私に乱撃を出させたのだからな」

ラカンは初めて自分の名を呼ばれ、やっと自分が認められたと感じ静かに目を閉じ気絶した。

回想終了

「つてな感じだな」

黙って聞いていた四人は何とも言えない顔をしていた。

「流石紅騎士、修行方法も滅茶苦茶ですね……」

「いやそれをやり遂げたこの馬鹿も、とんでもないとわしは思うぞ？」

「決めた！お師匠、アル！俺の修行に付き合ってくれ！あいつ等に勝つために魔法をもっと効率よく使えるようにしなくちゃならねえ！気の扱いではあいつ等に勝てない、ならあいつ等に勝てる物でかつしかねえ！」

「ほう、馬鹿弟子が自分から修行など言い出すとは珍しいの」

ゼクトはナギが自分から言い出したことに驚いていた。

普段は面倒だとか、最強の俺様には必要ないとか言っているからだ。

「あんな話しを聞いて黙ってられるか！ほらッさっさと行くぞお師匠にアル！」

「貴方らしいですね」

「まったく、直ぐに感化されるのじゃから」

そう言って三人は離れていった。

「ラカン……」

「ん？何だ詠春」

「俺達があの子二人に勝てる可能性はあるか？」



「……真正面からじゃ100%無理だな。俺達全員があらゆる全ての方法を使い、ナギが障壁から攻撃の魔法を完璧に使いこなせるようになって初めて互角に持つていけるかって所か」

それを聞いていた詠春はやはりかと溜息を吐いた。

「まあー敵対しない事が一番だ」

「それは無理だろう……我々は連合に所属しているのだから……」

その言葉にラカンは確かにと頷いた。

詠春は不安を感じながらナギ達が出て行った方向を眺めていた。

### 13・アスナ

グレートブリッジ戦後、ツルギとノーレはウェスペルティアへやって来た。

「随分と警備がザルだな」

廊下を歩きながらツルギは呟いていた。

「本当ですね……まさかここまでずさんだとは思っていませんでしたね」

「まあー普通は敵本拠地に二人で侵入してくるとは思わないだろうしな」

ツルギとノーレは敵の真っ只中と言う事を気にも留めないで歩いていった。

「き、貴様らはアヴァロンの！？おい！誰か応援を呼べ！」

「了解！」

「く、くそッ！」

「ここを通すな！」

だがツルギとノーレはあっさりと兵士達を薙ぎ倒していく。

流石に二人はこの広い城をくまなく歩くのは嫌な為、ノーレがそ

ここに居た偉そうな人を適当に捕まえて尋問したら、簡単に『黄昏の姫巫女』の居場所を吐いた。

「ふん、こんな簡単に国の機密を話すとはな」

「いいじゃないか簡単で、さっさと行くでしょうかノーレ」

「はッ！」

ツルギとノーレの二人は抵抗をする兵士達を倒しながら『黄昏の姫巫女』が居る部屋へと歩いていく。

「ここか……」

部屋の重厚な扉を開けて入ると一人の小さな少女が床に座っていた。

部屋は質素な造りで、窓には鉄格子、子供が好きそうな人形やら飾りやらが一切無く、まるで何処かの囚人の部屋に居るようだった。

「ノーレ……仮にもこの子は王族ではなかったか？」

「はい……調べた限りでは……」

「王族としてではなく『黄昏の姫巫女』と言う兵器として扱っていると云う事か……」

「……ダレ？」

床に座っていた少女が顔をあげてツルギとノーレを見る。

「こんにちは、自己紹介が遅れたね、俺の名はツルギ・マーフェス」

「私はノーレ・ハインデルクだ」

「君の名前は？」

ツルギは少女の前に膝を突きながら屈み、少女の頭に手を乗せた。

「……ナ、マエ……？」

「そう、君の名前だ。君にもあるだろう？」

「アスナ……アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフ  
ユシア」

「そうか、アスナちゃんか。いい名前だ」

ツルギがそう言ってもアスナは全くと言って良いほど反応しなかつた。

「ツルギ様……これは……」

「ああ、感情が殺されているな……この子は所詮この国の奴らに取ってはただの道具と言っことなのだろう」

「我々アヴァロンの住人が聞いたら怒り狂うような事をどうして連合は簡単にやるのでしょうか……」

「上に立っている奴等は勘違いをしているのだからさ、自分達が居

るから下の者達が暮らせているのだと……」

「実際は逆だと言うのにそれに気付いていないと言う事ですね」

「その通りだ。さて、ノーレ判っているな？」

「勿論です」

「よし、アスナちゃんこんな最低な場所から抜け出そうか？」

「デテモ、イイノ？」

無垢な瞳でツルギを見詰めながらアスナは聞いた。

「勿論、俺達ならどんな物からでも君を守るし、うちの国は色々特殊だから大丈夫さ」

ツルギはアスナに手を差し出しアスナはおずおずとツルギの手を握った。

「さて、ノーレ行くか」

「はい」

ツルギはアスナを抱えて、ノーレと走り出した。

暫らく走っていると流石に気付いたのか回りから怒号が聞こえてきた。

「待て！黄昏の姫巫女を連れて行かせはしないぞ！」

そう言いながら兵士が何人もツルギ達の周りを取り囲んでいた。

「ふん！足りんよこの程度の人数では！」

ノーレは言うのと同時に周りの兵士達を殴り飛ばし、気弾を壁に飛ばして壁を崩し、此方に向かって来れないようにした。

そうして三人は一気に脱出を果たした。

Side 紅き翼

「ナギ……あの時私達が助けた『黄昏の姫巫女』が『剣帝』と『紅騎士』に攫われたそうです」

アルビレオが紅き翼の面々に調べて来た事を報告していた。

「なんだって!？」

「おいおい……師匠達は随分と滅茶苦茶な事してるなーあの子は国の要たるうに」

ラカンが呑気に言い放った。

「丁度俺もそれを言おうとしていた所だ……だがあの二人に戦いを挑むのは……」

ツルギ達と戦った後に紅き翼の仲間になったガトウは、二人の實力を知っている為悩んでいた。

「何言つてやがる!あの子をあいつ等から救わないでどうするんだよ!？」

ナギは面々に向かって怒鳴りつける。

「落着けナギ」

「そつだぜナギ、それにあの二人なら酷い事はされないだろうし、安全の保証は100%だと思っぜ?」

「確かにな」

詠春とラカンは間違いない頷いていた。

「だあー！？お前ら！」

「それでしたら会いに行ってみますか？」

アルビレオがナギ達に問いかける。

「えッ！？？」

「マジで！？？」

詠春とラカンは本気かよと言う顔をし、

「おう！行くこうぜ！」

ナギは行く気満々だった。

「本当に行くのかの……」

「お前なら言うと思ったよ……」

ゼクトとガトウは半ば諦めていた。

「修行の成果を見せてやるぜ！」

「この馬鹿弟子は……戦いに行く訳では無いと言った……」



こづして再び紅き翼は二人に会いに向かった。

S i d e  
O u t

## 14・過去の亡霊

ツルギとノーレがアスナを攫ってから数日が経っていた。

攫った後は数多の追っ手が来たが、全て返り討ちにした為今では偶にしか来なくなっていた。

そしてツルギとノーレは特に今はする事が無いと言う事で、アスナに色々なことを教えていた。

それは常識から戦い方までそれはもう色々と教えていた。

「アスナ、お前は子供だ。だが子供でも戦うことは出来る。お前は私の馬鹿弟子の様に飲み込みが良いし、それに馬鹿弟子とは違い頭も良いしな」

「ツヨクナレル？」

「勿論だアスナちゃん。俺とノーレの元で修行したらあつと言う間に強くなれるさ！」

「……………」

ゆっくりと頷き、ノーレとまた向かい合い、ノーレに向かい拳を打ち出していく。

ノーレはそれを捌きながら色々と言っていく。

「いいぞ！やはり才能があるな！」

「……………」

アスナはそれを無言で聞きながら黙々と修行をこなしていく。

「この分ならアスナちゃんは剣技の才能もありそうだな」

「はい。おそらくアスナは私の拳技よりもツルギ様の剣技の方が合っていると思います」

「そうか、なら基礎の体捌きはノーレに任せて、剣技は俺が教えよう」

「はい」

「……………」

その日の訓練はこうして終わりを迎えた。

Side ????

「アーウェルックス、『黄昏の姫巫女』があの一二人に奪われたそう  
だぞ……どうするんだ？」

「勿論取り返すさ……だが君も判っているだろう？あの一二人は強い  
んだ、そう君が過去やられたくらいに」

「確かにあの頃の私は弱かった……だが今は違う！今なら私は！」

「そうだね、今の君なら彼等とやりあえるだろうね。その闇の石と  
君の力があれば」

「ああ、その為だけに今迄生きてきたのだ！やっとあの一二人と戦え  
る！」

「それじゃ向かうとしようか、あの一二人は君に任せるよ」

「あぁ」

Side Out

アスナと行動を共にするようになったツルギとノーレは、何時も  
の様に人気の少ない場所で訓練をしていた。

だがツルギとノーレは歩いている最中に行き成り足を止めた。

「誰かいるな……」

「……強いですね」

「……」

ツルギとノーレは何かを感じたのか警戒心をかなり上げ、アスナはそんな二人を黙って見ていた。

「狙いはアスナちゃんか？」

虚空への問いに、闇が蠢き始める。

背後で生じた気配に、ツルギはなおも続けた。

「アスナちゃん、みたいだな」

空気の質が変わった。

ツルギがエクスカリバーをを鞘から引き抜き、きつく握り締め、ゆっくりと後ろを振り向く。

そこには一人のフードを被った怪しげな人物がいた。

ツルギは澄んだ瞳の奥で、真紅の炎が揺れている。

その瞳からはアスナを狙った事への怒りがツルギを塗り潰している。

「ノーレ、敵を殲滅するぞ」

「はい」

二人は同時に駆け抜け、ツルギは刃を振るい、ノーレは拳を振るった。

だが二人の攻撃は黒い剣に受け止められた。

その黒い剣は両刃の直剣。

どちらかと言えば西洋の趣を備えた大剣は、ツルギとノーレの一撃を受け止めるに足りた。

だが刃が交わった瞬間に相手のフードが取れ、素顔があらわになった。

「貴様はツ!？」

「ノーレ知っているのか？」

ノーレは驚きの余りに固まってしまっていた。

「何故……何故貴様が此処にいる!?!いや、何故生きている!何百年も前に滅んだスルトーク兵のお前が!」

そのノーレの言葉を聞きツルギも表情を変えた。

「ほう意外だな、覚えていたとはな……」

「貴様のあの時の気迫はかなりの物だったからな」

「成程……まあ俺が生きている理由は「僕達が助けたからだよ」……と言っ事だ」

突如アスナの後ろに現われたアーウェルンクス。

「貴様は！」

「アスナ！」

「久しぶりだね『剣帝』に『紅騎士』」

「やはり不干涉は口約束だったか」

「それは誤解だよ剣帝……僕達は本当に干渉するつもりはなかったんだよ？でも君達がこの子連れ去ってしまったって、僕達も敵対するしかなくなてしまったんだよ。だから最初に不干涉を破ったのはそっちだよ」

「何を言っている？最初にメガロメセンブリアを使いこちらに戦争を仕掛けてきただろう？」

「それも誤解だよ。確かに協力者は多いが、君達の国に戦争を仕掛けたのは彼等の独断だよ」

何処まで行っても二人の話は平行線を辿る。

「さて僕は一足先に戻るよフォン君」



「ああ」

アーウェルンクスは転移魔法を使いアスナと共に消え去った。

「ちッ！あの子を如何するつもりだ！」

「俺も詳しくは知らんよ、それより今は俺の力が貴様等に何処まで通じるのか試させてもらう！そして復讐を遂げさせてもらう！」

感情をそのまま刃に変え、ツルギの刃を弾き飛ばした。

ツルギの方は目の前でアスナを攫われたせいも、顔からは表情が消えていた。

ツルギは冷静に刃を合わせ、ノーレは隙を窺いながら牽制を入れていく。

「来いよスルトークの亡霊……とつとと殺してやる」

ぞつとするほど冷たい呟きに、さつきまでの彼はいない。

殺意を速度に変え、ツルギは地を駆け抜ける。

そのツルギの瞳は必殺の名の下に、エクスカリバーがなぞるべき斬閃<sup>ライシ</sup>を見定める。

それはシンプル極まりない首を薙ぐ一撃。

「死ね」

エクスカリバーがその斬閃ライオンをなぞった。

「何ッ!？」

それはツルギにも予想外だった。

相手の体がぶれたのだ。

「ちツ……」

ツルギとノーレは瞬時に敵のギアが上がった事を悟った。

首が飛ぶ寸前に、敵は己の速度を上げ、ツルギとノーレの認識を  
超えた。

「それがどうしたあっ!」

怒りを隠さずに吼え、下がった敵に斬りかかる。

力みすぎたせいか、それは空しく空を切り、敵フォンに届かない。

その隙を縫うように、強烈な衝撃が腹に叩き込まれる。

「ツルギ様!」

ノーレはまさかの出来事に思わず声を上げてしまった。

ツルギは体がくの字に折れる中、膝蹴りを叩き込んできた敵フォンの顔を見た。

無表情。

復讐を果たす絶好のチャンスを前にしておきながら、それは感情を表さず淡々と義務のように戦いをこなす。

「貴様は……！」

「……………」

ツルギの言葉に何も反応する事無く刃が踊った。

ツルギもまたそれに応じ、金属音が周辺に鳴り響く。

風を切り裂く高速の乱打戦の中、威力と重さに勝る大剣にツルギは押されていた。

重く、鋭い斬撃。

だがツルギは思う、こいつは何かが違うと。

「お前は……何だ!？」

変わらずこちらを見据える敵。

違う。

この敵は異質だ。

「……………これならどうだ?」

再びぶつかり合う、エクスカリバーと黒い大剣。

刹那、ツルギの両脚は地を蹴り、揃えた足裏でエクスカリバーを押し出すように剣身を蹴りつける。

「……………！」

ほぼ拮抗していた力が崩れ、さしもの敵も押し返される。

その隙はツルギにとつて死への呼び声。

一瞬にして相手の胸へ一閃を叩き込む。

交錯する形で二者の位置は入れ替わった。

ノーレは離れて見ていた為その結果に気付き、ツルギは手に残る感触に、眉根を寄せた。

「……………しくじった」

背後を振り向くと相手は黒い球体に覆われていた。

「やはり貴様等は強い……………今回はこれまでだ……………いずれまた直ぐにやりあう事になるだろう……………それまでさらばだ」

そう言い終わると黒い球体はその場から消えていた。

あの一瞬に確かに相手を斬った。

だが……敵の驚異的な速度はそれを致命傷とする事無く回避し、あまつさえ逃走さえ許したのだ。

「俺達より……速い……？」

アスナを攫われた事と、自分達よりも速いという、受け止めがたい事実に、ツルギはエクスカリバーを鞘に収める事も忘れ、ただ立ち尽くしていた。

「ツルギ様……」

ノーレも今回の事は衝撃だった。

まさか死んだはずの人間が現われ、さらに自分達二人を相手に出来るほどの実力を備えていたのだから。

二人して暫らく考えている所に以前にも聞いた事がある声が聞こえてきた。

「やっと見つけたぜ『剣帝』に『紅騎士』！姫子ちゃんを返しやがれ！」

その一言を言った瞬間に二人からは以前とは比べ物にならないほどの殺気が周囲を襲った。

「……………！？」

「お前達か……今俺は虫の居所が悪い……早々に消える」

だが殺気を叩きつけてもナギは怯まずに食って掛かった。

「そう言う訳にはいかねえ！あの子は何処だ！」

「落ち着いてくださいナギ…… 剣帝に紅騎士、この戦闘跡…… ところで戦闘を行ったようですが相手の死体がないのと、黄昏の姫巫女が居ない事を合わせると、信じがたいですが誰かに攫われましたか？」

「……………」

二人は無言で肯定も否定もしない。

「おいおいマジかよ！？ 師匠達からそんな事をできる奴がいるのか！？」

「まさか『完全なる世界』か？」

「お前達も知っていたか……………」

『完全なる世界』の名前にツルギは反応した。

「ちっ！あいつ等かよ！」

「俺達はもう行く、アスナちゃんを助け出さなければならぬからな」

「おい、待ってくれ！」

ツルギとノーレは立ち去ろうとした所をナギは引き止めた、

「俺達は敵同士だ話す事など無い。だが『完全なる世界』の情報に

「関してだけは互いに提供しあってもいい」

「はい、それでいいです」

「お願いします」

アルビレオとガトウが頷き返す。

その後情報と連絡方法を確認したツルギとノーレの二人は、紅き翼の前から立ち去った。

#### 14・過去の亡霊（後書き）

『闇の石』

人の負の感情により力を貸す石。

フォンは死に掛けてた所を、アーウェルンクスの持っていたこの石により復活を遂げることが出来た。扱う人物の意思により変幻自在の闇の武器として扱うことが可能。だがフォンは主に大剣として使っている。



## 15・ノーレ対フォン(前書き)

ちよつと修正しました。

## 15・ノーレ対フォン

アスナを攫われてから幾つもの完全なる世界に関わりある拠点をツルギとノーレは襲撃したが、アスナに関する情報が見つからなかった。

二人は情報がなかなか手に入らない為、紅き翼と合流し情報を交換することにした。

「此方へどうぞ」

ガトウは頭を下げ二人を迎え入れる。

「確かガトウだったな、さっそく情報の交換を……ノールはその間周囲を警戒しながら好きにしていってくれ」

「わかりました」

小さい建物に入っていくツルギとガトウ。

ノーレが周囲を見ている時にタカミチが走り寄って来た。

「あの、ノーレさん！」

「なんだ少年？」

ノーレは腕を組んだままタカミチを見下ろした。

「僕に戦い方を教えてくれませんか？」

「何故私が……面倒だ」

「お願いします！」

勢い良く頭を下げるタカミチ。

「そもそもお前は、ここにいる奴等に教えてもらえばいいだろう？」

「確かに僕の師匠であるガトウさんに教えてもらっていますが、もっと強くなりたいんです！」

ノーレはそんなタカミチの真剣な顔と目を見ていた。

「私からもお願いします。教えてあげて貰えませんか？」

「何故だ？」

「彼は魔法を使うことが出来ません……だから貴女にこそ彼を鍛えることが可能なのではないかと」

ノーレは胡散臭そうにアルビレオを見ていたが、魔法を使えないと言う事情からか、つつい許可を出してしまった。

たとえ子供でもノーレは妥協などしないつもりでいる。

「では貴様の能力を知る為に、実戦形式でやるぞ」

タカミチは直ぐに構えを取り、ノーレは静かにタカミチに近づいて行く。

「はッ！」

タカミチの拳がノーレに向かう。

ノーレはそれをかわし続ける。

時々蹴りを放ちタカミチを吹き飛ばすが、タカミチは起き上がり何度でも挑んでくる。

「成程……な」

才能が無い……絶望的に……ノーレはタカミチの拳をかわしながら内心そう思っていた。だがそれでも諦めずに此処までやってきた

という事はタカミチの動き等を見ればわかる。だからこそノーレは面白いとも思った。

「少年……初めに言うておく、貴様に才能は無い。良いところ二流止まりだ」

「……………」

その言葉にタカミチは俯き拳をきつく握っていた。

「だがッ！貴様が私の言う事を疑う事無くやるのなら強くしてやる！どつする？」

俯いていたタカミチは顔を上げ。

「はい！」

頭を下げた。

「貴様はとにかく私の動きを模倣し、練習を重ねる唯それだけを愚直にこなせ」

「はい！」

互いに情報を交換を数度しながら、紅き翼のオリンポス山での誓いが行われ早数ヶ月がたち、テオドラ第三皇女やアリカ姫達の行動等で、何時の間にか全世界共通の敵と国家になってしまったツルギ達であった。

だがツルギ達アヴァロンは元々帝国以外からは、世界共通の敵のような立場だった為、関係なかった。

紅き翼は連合の人間を殺したりはしないでいたが、ツルギ達は容赦なく今迄通りに殲滅していった。

そのせいか紅き翼が徐々に味方を増やす事に成功しても、アヴァロンに対しては視線が依然厳しいままだった。

そしてその間にも情報を集めていくうちに、『完全なる世界』の本拠地を突き止め、紅き翼やアリアドネー混成軍より早く、アヴァロン軍の『剣』と『盾』に『剣帝』と『紅騎士』は最終決戦場へと向かっていった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・



目の前に広がる後景は、始まりの地とも言われている秘境の地オスティア。だが此処にこそ『完全なる世界』の本拠地がある場所でもある。雲の上に鎮座するその古代の宮殿。世界最古の都王都オスティア空中王宮最奥部『墓守りの宮殿』と呼ばれる場所に、まさか誰もがこの場所に敵の本拠地がある等とは思っていなかった。そんな全てが始まった場所で今、世界を無に帰す儀式が行われようとしていた。

「ツルギ様、『剣』『盾』の出撃準備が整いました」

ノーレがツルギの前に膝を突き報告を済ませ、その後はツルギの斜め後ろに控えた。

「行くぞッ！」

それぞれが準備が整いツルギの声と共に攻めようとした瞬間に上空から声が掛かった。

「此処まで辿り着いたか……」

その声をツルギ達は忘れもしない。

己たちの数少ない失態の一つである元凶が目の前に居た。

ノーレはすぐさまツルギの前に出て戦闘体勢に入る。

「ツルギ様は先に行ってください……あれは私が……」

ツルギは両目を閉じ少ししてから両目を開けた。

「……奴は強いぞ？」

「強いですね」

「……死ぬなよ」

「死にません」

「……任せる」

「はい」

ノーレは周囲に居る誰もが見たことが無いような綺麗な微笑を、ツルギに向けて浮かべていた。

ツルギは一気にその場を駆け出す。

フェンが率いる『剣』と『盾』は、ノーレと敵から離れ、周囲の敵を駆逐するため動き出した。

「さあ始めようか……」

フォンが静かに告げる。

「アデアット」

ノーレは『炎帝の四肢甲』を装着し構える。

「てつきりツルギ様に攻撃すると思っていたが？」

「確かに奴も標的だが、お前達二人を同時に相手にするつもりは無い。お前を殺した後に奴も殺すさ」

その言葉にノーレは最上級の殺気を放った。

この殺気は普通の人だったら浴びただけで死んでしまいそうな程強烈だった。

「前回偶々私達と互角に戦えた事くらいで、調子に乗るなよ？今回は全力で貴様を殺す」

合図も何も無く二人は同時に、砲弾のような勢いで跳躍した。

二人の速度は凄まじい音を残していく。

フォンは今迄の長い時はこの為にあつたと思っている。

歡喜、興奮、恐怖、感動　あらゆる感情がフォンの内部でせめぎ合う。

「最終決戦だ」

フォンはゆっくりと右腕を掲げ　やってきたノーレに出迎え代わりに、闇の石から作り出した無数の闇の刃をノーレに叩き込んだ。

ノーレは両拳を構え、吼える。

「『炎帝の四肢甲』よ　全てを燃やせ！」

ノーレの放った炎が、黒き闇の刃を燃やし消す。

「やはりこの程度では掠り傷一つつけられないか」

元々この程度の事など予測していたフォン。

フォンはふと、何かに気付いたように首を太陽の方へと向けた。

「美しいな。美しく、素晴らしい……さあ、我々の決戦に相応しい舞台だ。この始まりの地で、終わりの地で　　殺し合おうじゃないか！」

そんなフォン・ガンレツドの言葉と同時に　　戦いが、始まった。

音速の闇の刃の斬撃、超高熱の炎が互いにぶつかり合う。

「　　フンッ！」

だがフォンはノーレの炎を消しきれず、炎を直撃を受けた。

「くツ闇の石で防御しても熱いな……！」

今のノーレが放った炎は既に人が耐えうる限界を完全に超えているレベルだ。

「ふん、ほぼ無傷か」

「やっと俺はこの領域にこれたのだな……貴様達と同等に戦える事が、これほど愉快だったとは！」

互いにあらゆる攻撃が炸裂し、あらゆる攻撃が相殺された。

ノーレは炎の剣を作り出し、フォンに飛び込んでいく。

「燃え切り裂け……！」

右手に炎を握り締める。

槍のように、あるいは塔のように炎が伸びる。

その刃はフェンのアーティファクトである『伸縮八刃』のように伸びていく。

その刃が全長数十mに達した瞬間、ノーレは動いた。

「貴様のその闇の剣に合わせてやる」

「面白い……！」

膨大な長さの剣をほのおしつかりと握り、振りかぶる。

闇の刃と、炎の刃が激突する。

周りに居るフェン達でさえ近づけず、固唾を吞んで見守るだけ。

ノーレは吼える。

「どうしたフォン・ガンレッド！前より動きが鈍いんじゃないか？」

「いいや、貴様が速くなっているだけだ！」

フォンは汗と血を流しながら、闇の刃を操り続ける。

激突するたびにまるで大気が大きくたわむ様を感じる。

空振りするたび、空気が裂けた。

二人が戦ったたび、周囲の大地が悲鳴をあげた。

ノーレは思う。フォン・ガンレットは怪物だ。執念だけで此処まで実力を上げてきたのだから。

だからこそノーレは自分に言い聞かせる。

負けられないと。

ツルギとの約束が一番であるが、それでもノーレは今のこの世界が嫌いではない。

勿論メガロメセンブリアなどは嫌いだが、自分達が興した国や其処に住んでいる人達は好きであるし、守るべき対象でもある。

だからこそ勝つと改めて自分の魂に誓う。

「行くぞオオオツ！」

ノーレは剣を既に消して、己が拳で向かっていく。

「『乱撃』」

高速の乱撃がフォンの体に打ち込まれる。

「これならどうだ………！」

フォンが全身から血を噴出する　　笑う。

「流石にやるものだ………！」

だがフォンは何事も無かったかの様に立っている。

「闇の石よ……俺と共に敵を滅ぼせ！」

フォンの周囲から数多の闇の刃が出現し、ノーレに向かう。

「ちッ！」

その闇の刃は速度はともかく、ノーレに合わせて動いていく。

天地上下左右前方後方

全ての場所に、死角無し。

「負けるかぁッ！」

その刃はノーレの全身を切り刻んでいく。

「耐えるか、これならどうだ……！」

「くッ……！」

一際大きな刃をノーレは腕をクロスさせガードする。

だが、その後フォンから放たれた小さいが故に速度が段違いな刃によって、その大きな刃が切り裂かれ、無数の刃によってノーレは無数に切り裂かれる。

「くッ……がッ……！」

ノーレは何とか耐えているが、このままでは分が悪すぎると感じ



たのが攻勢に出た。

「なら、これで……！」

ノーレは全身に炎を纏わせる。

その炎により闇の刃を消滅させていった。

互いにゆっくり、一歩一歩確認しながら近づく。

腕が届く場所まで接近する。

「……………」

笑い合う。

そして 殴り飛ばす。

フォンが吼える。

ノーレも吼える。

再び、戦いが始まった 最早互いに思うことは無く、

お互いを肯定し、弾劾するための戦いが。

果て無き戦いを永遠のように続けながら、戦い、戦い、戦い。

だがそれも次第に終わりに近づいていた。

互いに肩で息をしている。

フォンもノーレもそれが判っているのか最後の力を出そうとしていた。

「闇の石よ……全ての力をこの一撃に」

全ての力が凝縮された刃が手に現われ始める。

ノーレも最後の力を解放する。

「一千度！」

炎はどンドン燃え盛る。

「一億度！」

そしてついには億を超えた。

ノーレ自身これを使うとは思っていなかった。

ツルギさえ知らないこの技を……

最早この炎は熱いとすら感じられないのは、ある意味で恐ろしい。

「極限圧縮！」

そしてノーレはその力を発動させる。

瞬く間に炎は小さく縮み始め、ノーレの手の上に収まった。

フォンが愕然とした表情でノーレを見た。

「……まさか、此処に来て太陽を造り出すか！」

ノーレはただただ超高温の炎を発散し続ける。

「一兆度到達……!!」

そして互いに最期の一撃が放たれる。

「零!!」

ノーレの放つ一撃は、全ての終焉であり、全ての始まりである。

「奥義『ビッグクランチ全ての終焉』」

放たれた一撃により終焉を迎え、極限まで収束した。

極限まで圧縮された超高温。

それが爆発した。

フォンの放った一撃は、ノーレの一撃に耐え切れず、そのままフォンと共に飲み込まれた。

離れて戦っていたフェン達や、アリアドネー混成軍でさえ、余りの戦いに背筋に掻いた汗が止まらなかった。

「くっ……！流石に……奥義は、気を使い過ぎて……身体に負担が、  
掛かり過ぎる……」

ノーレは両膝を地面につけ動けないでいた。

「貴様の名は、生涯忘れん……スルトーク最後の兵士、フォン・ガ  
ンレット」

そのままノーレは前のめりに倒れ気絶した。

S i d e ナギ

「じねは……」

一体どうなってやがる！？敵の本拠地が『墓守りの宮殿』と判り、

アリアドネー混成軍と共に来て見れば、既にアヴァロン軍らしき連中が周囲に居る大量の敵と戦っている。

それだけじゃねえ……『紅騎士』に、それと戦っている敵……とんでもない戦いをしてやがる。

『紅騎士』の気弾や炎、敵の黒い闇の様な刃が周辺を抉ったり、切り裂いたりと地獄絵図になっている。

だが『剣帝』だけが見あたらねえ……既にもう『墓守りの宮殿』に乗り込んでいるのか？

だとしたら俺達も直ぐに行かなくちゃいけねえ！

「皆！すぐに『墓守りの宮殿』に急ぐぞ！」

「そうですね……『剣帝』が既に向かっているようですし」

「そのようじゃな」

「急いじつ」

「よっしやあー！」

「この戦いで全て終わらせてやるぜ！」

Side Out

S i d e    セラス

私は今、何を目の当たりにしているの？

周囲は精強と言われているアヴァロン軍が次々と敵を駆逐していく姿。

特に一振りで何体もの敵を先陣で倒しているあの男など別格だ。

それにあの色々と有名なアヴァロンの『紅騎士』が、敵と思われる者と一騎打ちをしている。

とんでもない速さで動き回り、黒い刃や炎で辺り一面を地獄絵図にしていた。

両者とも私達が相手に出来るような人達ではなかった。

出来る事はただ見守るだけ……

そして遂に両者が終わりに近づいてきたと思ったら、敵の方からとんでもない力を感じた。

あの闇を見ていると恐怖でどうにかなってしまいそうだった。

だが次に『紅騎士』を見ると、其処には闇とは真逆の最早太陽と言っても差し支えない炎があった。

私は今奇跡を見ている。

人が太陽を造るなんて……

そして両者が最期にぶつかりあい途轍もない爆発が起こり、私は目を開けていられなかった。

その爆発が終わると、周囲は大きなクレーターになっていて、そこに居たのは唯一人、勝者である『紅騎士』だけだった。

私はどんな事があるともあの人達だけは敵に回したくないと、心から思った。





## 16・最終決戦

ツルギは宮殿内に侵入していた。

「宮殿内には罾が仕掛けられていたが、物理的な罾はエクスカリバーを一振りして破壊し、魔法的な物はツルギ自身の強力な魔法障壁に弾かれる。」

暫らく歩いていくと、一際大きな大広間に出た。

「最終戦だと言うのにお前だけか？アーウェルンクス？」

「本当はここに他にも数人いたんだけどね……紅き翼も此処に向かつて来ていた為に、そちらに行ってもらったよ」

「それは好都合だな。奴等も役に立つものだ」

「僕の方も予定は狂ったけど、『紅騎士』がここに居ないだけでも喜ばしいね」

「ふん、時機にここに追いついてくるかも知れないぞ？」

「幾ら『紅騎士』でもフォン君を瞬時に倒す事は出来ないだろうし、来れたとしても怪我で足手まといになるさ。それよりどうしても戦うのかい？」

「今更だな……」

「前にも言ったけど僕達は君達アヴァロンと戦う気なんてなかった

んだよ。だから今からでも改めて不干渉と言うのはどうだろうか？僕達についてくれるならそれが一番だけど」

「魔法世界を消す為にか？」

静かに頷くアーウェルンクス。

「流石に魔法世界が消えたらアヴァロンと言えどただで済みはしないだろう……それにうちの国民には亜人達もいるから魔法世界が消えてもらっても困るんだよ」

「本当に残念だよ……君程の人物に判ってもらえないとは」

それが戦闘開始の合図となった。

「障壁突破 石の槍」

ツルギは鞘からエクスカリバーを抜き、石の槍を叩き切り、その後瞬動でアーウェルンクスの懐に入り、剣を振り抜く。

「流石は世界最強で最高の剣士だね！」

何とか紙一重でかわし、ツルギから距離を取った。

「この程度で驚いてどうする！」

アーウェルンクスは石の槍を大量に放ち、ツルギを近づけない様にするが、全てエクスカリバーで切り裂かれる。

「くッ……化物だね……！」

「貴様等はそんな化物に喧嘩を売ったんだよ！」

斬撃を飛ばし周囲を切り裂いていく。

「本当にメガロメセンブリアは余計な事をしてくれたよ……こんな面倒事になったんだから……だけど僕達の邪魔はさせない！」

「『完全なる世界』……貴様等はアヴァロンの敵だ……殲滅する！  
！」

S i d e 紅き翼

「随分と滅茶苦茶になってるな」

「恐らく『剣帝』が周囲の罫を切り裂いたんでしょう。その時の衝撃波などで周囲も一緒に壊したんでしょうね」

周囲は切り裂かれた跡やら、抉り飛ばされた跡やらと、台風が通った跡のようになっていた。

「はあー師匠も大概だけど、『剣帝』もすげえな！」

ラカンは頷きながら感心していた。

「じゃがこの様子じゃ既に終わっておるかも知れぬな……」

ゼクトは余りの破壊された周囲に既に終わっているかもと感じていた。

「このままじゃ俺がする事が無くなっちまう！急ぐぜ！」

「待てこらー！」

ナギとラカンが急いで走り出した。

「おいッ！ナギ！？ラカン！？」

「ふふ」

「莫迦弟子共が……」

詠春、アルビレオ、ゼクトがナギ達の後を急いで追って行った。

Side Out

紅き翼が迎撃に出て来たアーウェルンクスの仲間を倒し、大広間らしき場所に出た時には既に終わりの時を迎えようとしていた。

アーウェルンクスは腹にエクスカリバーを刺され、最早風前の灯だった。

「はッ……………はは…本当に化物、だね……………君は……………」

「貴様も人の事は言えないだろう……………こっちも傷だらけだ」

ツルギも彼方此方に傷を作り、左腕は動かないのかだらりと下がっていた。

「昔会った時は此処まで強いと思っていなかったんだがな……………」

「その通り…だよ。君達に、対抗する為に……………無理矢理、頼んで、ライフメーカー造物主に、力を貰ったんだよ…だけど、それでも…足りなかったよ  
うだ」

「消える前にアスナちゃんの居場所を吐け」

だが返事は遮られた。

「おい！何か来るぞ！」

ナギがツルギ達に向けて声を発した。

その直後に光の筋が、ツルギとアーウェルンクスを襲い掛かる。

ツルギは咄嗟に反応し離れたが、アーウェルンクスはその光に貫かれていた。

「もう来ていたか……紅き翼」

「『剣帝』！さっきの光は何だ一体！？」

「ラスボスの造物主ライフメーカーが来たんだろうさ……貴様等はさっさと消えろ！邪魔だ！」

「なッふざけんな！」

そんな言い合いをしている紅き翼とツルギの元に、造物主ライフメーカーの魔法らしき先程の光が襲い掛かる。

「全員下がるのじゃ！最強防護クラテイスター・アイギス」

「気合防御！」

「全て遠き理想郷アヴァロン！」

紅き翼は防御壁を張るが、まるでガラスが砕けるかのごとく、最強防護クラテイスター・アイギスを構成していた魔法陣を砕いていく。

遂に最後の一枚まで防御壁は破られ、紅き翼は光に飲み込まれた。

ツルギだけは切り札である鞘に魔力を注ぎ込み、全て遠き理想郷アヴァロンを展開し耐え切った。



「アヴァロン全て遠き理想郷がなかったら、やられていたな……」

あらゆる物理干渉を無効化する全て遠き理想郷。アヴァロンだが切り札であるだけあって魔力はかなり喰われ、もう一度の発動は厳しいとツルギは思っている。

本当なら鞘には不死性が備わっていたが、湖の乙女がそれを無くし、全て遠き理想郷の展開に関しても相応の魔力を必要とするようにしていた。

ツルギは最初はそれでも問題ないとこの世界に来たときは思っていたが、この様な敵がいるのなら全て遠き理想郷の展開魔力はもう少し減らして欲しかったと内心思ってしまった。

ツルギは紅き翼はどうなったかと周りを見回してみると、ラカンの両腕は吹き飛んでいたし、内臓なども傷ついていると思われるほどの怪我。詠春は意識も無く立つ事すら敵わない。アルビレオも満身創痍、ゼクトもナギも全身に傷を負い、決して無事とは言えなかった。

「貴様等は傷を治している邪魔だ……奴は俺が消す！」

「なッ待ちやがれ！」

「アレは倒せる相手ではありません」

「そうだ！あれは俺が初めて勝てねえと思ったほどの相手だった！いくらあんたが強くても無理だ！」

「ふッあの程度に勝てないだと？俺を舐めるなよ！」

ツルギは造物主ライフメーカーに向かって行った。

「……………」

造物主ライフメーカーは静かに佇んでいる。

「さあ終わらせようか」

ツルギの前から造物主は急にその場から消え去った。

「上かッ!？」

光がツルギの頭上から降り注ぐ。

「この速度にこの威力か!」

ツルギは全力で回避に力を注ぐ。

光の雨が止むと、ツルギはお返しとばかりに何十何百もの斬撃を飛ばす。

「ちッこれでも駄目か!」

数多くの斬撃を放つが、悉く造物主に防がれていく。

造物主から降り注ぐ光は、そんなツルギを無視して追い詰めていく。

ツルギはそれでも刃を振るう。

「はははははは!私を倒してどうする!アヴァロンの王よ!貴様ももう判っているのだらう!この世界が既に限界にきている事を!だからその前に救おうと言っのに!」

強大な魔方阵から放たれる幾数もの黒い筋がツルギに向かって来る。

それを魔法障壁で無理矢理弾きながら、造物主ライフメーカーに接近していく。

「確かに貴様の言う通りなのかもしれない！だがッ！俺は全てを消す等決して認めないッ！俺は！俺達はッ！最後のその日まで全力で生き続けてやるッ！」

ツルギは本当の意味でエクスカリバーを鞘から解き放った。

インビジブル・エア 風王結界から解放されたエクスカリバーは、流石は星の鍛えた聖剣だけあって見る者全てが魅了される程の剣だった。

ツルギの魔力を“光”に変換し剣身は眩いまでの輝きを放っている。

「私を倒したとしても貴様もいずれ知る事になるだろう！私の語る『永遠』こそが、『全て』の『魂』を救い得る唯一の次善解だとッ！」

ツルギは剣を肩に担ぎ右手で一気に振り下ろした。

「約束された勝利の剣——————！！！」

フネーカー ツルギの全魔力が込められた極大の極光が、全てを飲み込み、造物主ライを飲み込んだ。

その極光は天を貫き、この日この瞬間、戦争が終わった事を全ての人に伝えた。

ツルギはその後急ぎアスナを救出することが出来たが、既に儀式は最終段階に入っており、光は収まらない。

最終的にはアリカによる反転封印術式により何とか封印は成功した。

しかし本当の試練はこれからだった。

オスティアが徐々に高度を落とし崩落しているのだ。

オスティアの民は魔法が使えず脱出作業も難航していた。

ツルギは直ぐに部下に連絡をし、至急『剣』と『盾』に救出する様に命じた。

これは魔法を使わない『剣』と『盾』である為、問題なく救出作業を行え、さらにアヴァロンの使う空中船は魔法技術を使わない物である為、何も気にせずに飛ぶことが出来た。

だがツルギにはもう一つ思惑があった。

これを機にオスティアを……ウェスペルタィアを、アヴァロン領として取るうと考えていた。

連合に問答無用で持つて行かれるくらいなら、アヴァロンが貰っても良いだろうとも考えていた。

結果的にオスティアの民は全員救出することが出来た。

その二ヶ月の間にアリカ女王は、難民の受け入れや奴隷公認法の成立などで『災厄の女王』と蔑まれるようになってしまった。他にも父王殺し、『完全なる世界』の黒幕等と連合は自国民に与える情報を操り、そしてその罪を着せられケルベラスの無限監獄に投獄されてしまった。

その後ヘラス帝国とメセンブリーナ連合から話し合いの席についてくれとの要望が来た為、一応参加の旨は伝えた。

ツルギ達も今の所は連合を、鮮血事件の時のように滅ぼそうとまでは思っていない。

国民に手を出された訳でもなく、喧嘩を売られただけだったから。

だがもし連合等がふざけた提案をするつもりなら、容赦はしないつもりでした。

## 17・交渉（前書き）

こつちを久しぶりに更新です！



## 17・交渉

ツルギ達が交渉場所に赴いた時には、既にヘラス帝国、メセンブリーナ連合共に先に来ていた。

ヘラス帝国からは皇帝陛下、第三皇女テオドラ、近衛騎士数十名。

メセンブリーナ連合からはメガロメセンブリア元老院、各国代表、紅き翼、兵士が数十名。

そしてこの交渉の席の進行を行う、中立国であるアリアドネーの総長に騎士団。

その場にツルギとノーレが現われると、その場にいた人間が一斉に静まり返る。

その中でも一番先に正気に戻り、声をかけてきたのは流石と言っべきかヘラス帝国の皇帝だった。

「お初にお目にかかるアヴァロン王、この度はこの交渉の席についてくれて感謝する」

「気にする必要は無い。此方も必要と思ったからこそ受けただけだしな」

互いに握手をかわす。

「アヴァロン王初めまして、しかし従者一人だけで来るなんて流石ですな」

元老院の一人がツルギに向かって話しかけてきた。

「当たり前だ。私達に何の危険があるんだ？ 私達二人に散々やられた事を忘れているのか？」

「ぐツ！ ではまた後程！」

怒りを隠そうともせずに行って行く。

そして皇帝とツルギは席に着き、交渉が始まった。

「この交渉は魔法世界全体に放映されている。」

アリアドネーの総長の進行で交渉は始まった。

「では我々連合は帝国及びアヴァロンに停戦の要望を出す。今回の戦いは『完全なる世界』により画策されたものであったものだからだ。我々連合はこれ以上無益な血を流さぬ為に両国共に受け入れて貰いたい」

「我々帝国は停戦はしてもいいが、その場合連合には賠償金を払って貰う」

「なッ！ 何故我々がッ！」

テーブルに拳を叩きつける元老院代表。

「何故貴国らの領土に侵攻出来ているのに態々引かねばならない？」

「くッ！」

「我々アヴァロンも同じく停戦などするつもり等無い」

ツルギは強気に見せる為に停戦などしないと言い張った。

「我々は最初戦争するつもり等皆無だった。だが連合が味方に着か

ぬのなら我が国に戦争を仕掛けると言い放った事がアヴァロンの戦争参加理由だ。それを今更停戦だと？ふざけるなよ若造共が！」

押し黙る元老院と各国代表達。

アヴァロン王が不老である事は、各国に知られている為言葉に誤りは無いが、言う事が見た目的に真逆である為この交渉を見ている国民達には違和感が強かった。

「ならばこの無意味な戦争をまだ続けると言うのか！」

「自業自得だ。我々帝国は既に停戦する為の条件は提示したのだから、後はアヴァロンからの条件だな」

帝国皇帝が冷静に連合へ言い放った。

「今回の交渉の場が提案されなければ、我々はメガロメセンブリアを滅ぼすつもりだった」

ツルギのその言葉を聞いていたメガロメセンブリアの国民は恐怖を感じた。

今迄自分達の国が負けるなんて思ってもいなかった。

連合でも一番の国力を持ち、紅き翼と言う英雄までいた。

だから自分達の国が負ける事など無いと元老院は情報を操っていた。

「我々が要求する物はこの紙に書いてある。アリアドネー総長これ

を……」

「我々帝国の要求する賠償額はこの紙に……」

総長が紙を受け取ると、連合側から罵声が上がった。

「ふざけるなッ！ 何故我々だけがッ！ 戦争には両者責任がッ！」

「ならばこの戦争を続けるだけだが？」

皇帝が無慈悲に言い放つ。

「両者とも落ち着いてください。この要求は連合にお渡しします。ここで一旦休憩を取りましょう」

そこで一旦休憩が挟まれる事となった。

「アヴァロン王」

休憩中に声をかけて来たのはヘラス帝国の皇帝だった。

その横には小さい女の子が居た。

「ああツルギでいいですよ所で……」

「ではそう呼ばせてもらおうツルギ殿」

「父上！ 妾の事を忘れておるのじゃ！」

「む！ すまんすまんテオドラ……ツルギ殿紹介が遅れた、我が娘である第三皇女のテオドラだ」

「初めましてなのじゃツルギ王！ 帝国第三皇女のテオドラじゃ！」

テオドラから差し出された手を握りツルギは握手をする。

「初めましてテオドラ皇女。私はツルギ・マーフェス。アヴァロン

の王をやっている。今回の戦争では君が頑張っていたと聞いているよ」

「そう言われると恥ずかしいのじゃー！」

「いやはやお恥ずかしい。テオドラはじゃじゃ馬でして」

「父上！」

テオドラが皇帝の服を引っ張りながら可愛らしく抗議している。

「いえ、立派な娘さんで羨ましいですよ」

ツルギはその光景を微笑ましく眺めていた。

「お二方、そろそろ再開いたしましょう」

総長が交渉を再開させる旨を知らせに来た。

二人はまた交渉の席に着いた。

Side メセンブリーナ連合

「くそッ！ まさかこんな事になるとはッ！」

「確かに……ところで帝国の要求額とアヴァロンの要求している物はなんだ？」

「待て、今見てみる」

元老院の一人が内容を確認している。

「なッ！？」

読んでいた一人の男が驚愕に声を上げる。

「どうした？」



「アヴァロンの要求している物が……」

「何だ！」

早く言えと言わんばかりにテーブルに拳を叩きつける。

「ウエスペルタティア王国領土をアヴァロン領へ帰属させる事。拘束しているアリカ陛下の身柄をアヴァロンへ渡す事」

「くッ!？」

「しかし逆らう事はできん……逆らったら滅ぼされる。もし滅ぼされなくとも元老院の人間は全員皆殺しは確定だ」

その皆殺し言葉に全員が押し黙った。

「だがこのままでは我々は議員の座から失職してしまう……」

「アリカ陛下に関しては何とか交渉してみよう……でなければ戦犯がいなくなってしまう」

元老院議員になった殆どの者は欲望、保身で動いた者が多い為、この提案を受ける事にした。

「帝国の賠償額はどのようになっている?」

「くッ! こちらもとんでもない事になっている……」

「メガロ十年分の国家予算!? 連合各国から集めても五年は払い

終わるまでに時間がかかるぞ……」

「これも受け入れるしかない……我々にはもう戦う戦力が無いのだから……」

「……とくアヴァロン軍に兵を殺されてしまったから……」

連合全員が肩を落としていた。

S i d e O u t

「それでは交渉を再開します」

「それで連合は先程の条件を飲むきになったのかな？」

ヘラス帝国皇帝が早速連合に切り出した。

「我々連合は……先程の条件を受け入れる……」

連合は悔しそうに呟いた。

「だがッ！ アヴァロンは『完全なる世界』の首謀者、ウエスペル  
タティア王国アリカ陛下の身柄要求等してどうするつもりだ？」

連合は口元を歪めていた。

「……………くッ！……………」

紅き翼やテオドラは既に連合の手によって情報操作され、『完全なる世界』の黒幕にされたアリカの事を何も出来ずにいた。

ガトウ等も色々と状況を説明したが、結局はアリカの罪を消す事は出来なかった。何より既にアリカ自身が父王を殺し、国を滅ぼした等、国民に悪名が知れ渡ってしまったせいでもあった。

「このやるッ！」

ナギが元老院議員に掴みかかる。

「ナギツ！？」

「紅き翼の諸君は黙っていたまえ！ 今はアヴァロン王と話しているのだ！」

議員は気にした様子も無く話を続ける。

「ほお、『完全なる世界』の首謀者ねえ」

「その通りです！ それにアリカ陛下にはクーデターの容疑もある。我々連合はアリカ陛下を最上級犯罪者としてケルベラス渓谷での極刑を我々の手で行いたいと思います！ なのでアヴァロンのアリカ陛下の身柄要求は拒否させていただきます！」

「そう！ この様な戦争を引き起こしたアリカ陛下を、国民は一刻も早い処刑を望んでいるはず」

声高々に言う代表達に、連合側の紅き翼と良識ある一部議員以外からは拍手が巻き起こる。

だがツルギは連合の方に怒気を放った。

「さつきから黙って聞いていれば調子に乗りやがって！ そこまで自分達の功績が欲しいか連合の愚か者共が！ 『完全なる世界』の首謀者は俺がこの手で消した。そして俺が調べさせた所によると、アリカ陛下がクーデターを行ったのは父王が『完全なる世界』に操られていたと言う報告も上がっている。よって、我々アヴァロンの要求は変わらない！」

「アヴァロン王は我々が功績の為だけに嘘をついていると言つのか！」

連合と元老院の人間達が後ろの方で喚きだした。

「フェン」

ツルギが凍りつく様な言葉を放った瞬間、騒ぎ立てていた元老院議員の一人の首が飛んだ。

「……………なッ!?」「……………」

「喚くな……ツルギ様の御前だぞ」

フェンは一瞬にして姿を現し、連合側の人間に忠告した。

元々フェンはツルギの護衛として来ていた。何かする者達が居るとしたら連合側なので此方で待機していた。

「アヴァロン王！　ここは交渉の席です！　争いは禁止と通達していたはずです！」

「私はこの交渉に請われてこの場に居るのだ。私が連合に交渉に着いてくれと頼んだわけではない。何より言ってしまうえば、連合を皆殺しにすれば一番問題解決に速いのだが？」

内心ツルギはそこまでではしたくないと思っていた。してしまったら後始末が大変だからだ。

だがアリアドネー総長はそれ以上何も言えず黙ってしまった。

アヴァロンはそれだけの事をする實力もあるし、実際に鮮血事件で国を滅ぼした事がある事を知っているからだ。

「これを見ている連合各国の民にも告げる！ 貴様等は我々アヴァロンとヘラス帝国によって生かされていると言う事を忘れるな。もしこの交渉が失敗に終われば貴様らの命は無いと思え」

この交渉を見ていた連合各国の国民は、この交渉が無事に成功に終わる事を心から願わずにはいらなかった。

「わ、わかった。アリカ陛下を引き渡す……」

連合も観念したのかアリカ陛下を引き渡す事を承諾。

こうしてツルギの思惑通りに交渉は進み終わりを上げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8089/>

---

ネギま！？王になった少年！

2011年7月24日17時43分発行